

# 「中学校社会科における評価教材の開発」

## もくじ

* 発刊に際して	1
I. 社会科の授業改善と評価の工夫	3
II. 地理的分野	11
1. 地理的分野ではぐくむ学力	12
2. 関心・意欲・態度をはぐくむ授業例	15
・「日本の人々の生活」	
3. 関心・意欲・態度をはぐくむ評価	24
III. 歴史的分野	29
1. 歴史的分野ではぐくむ学力	30
2. 意欲をはぐくむ授業例	34
(1)身近な地域の地名のおこりから発展させた歴史学習	34
(2)校歌に表現された身近な地域の歴史	40
3. 意欲をはぐくむ評価の工夫	47
IV. 公民的分野	51
1. 公民的分野ではぐくむ学力	52
2. 関心・意欲・態度をはぐくむ授業と評価	58
3. 関心・意欲・態度をはぐくむ授業例	61
・「国際社会における日本の役割」	

# I .社会科の授業改善と評価の工夫

## 1 授業でどのような学力を身につけるのか

学校教育の在り方については、我が国では中央教育審議会が「21世紀を展望した我が国の在り方について」の答申として、「これからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自ら律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるためには健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を「生きる力」と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた」と述べている。学校教育においても、たんに、知識・技能を身に付けるだけでなく、主体的に生きる資質・能力をはぐくむことの重要性を指摘している。また、同第二次答申では「教育は、『自分さがしの旅』を扶ける営みと言える。」として、教育は子供たちが自分自身の力によって自らにふさわしい生き方を選択する能力や資質を身に付けることが重要であると述べ、生涯学習社会における学校教育の役割の見直しとともに、多くの知識の学習に偏りがちであった教育の転換を求めている。

また、ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書では、21世紀は生涯学習の理念のもとに教育を考えることが不可欠であるとし、「いかに学ぶかを学ぶ」ことが重要であるとし、「知ることを学ぶ」「為すことを学ぶ」「人間として生きることを学ぶ」「共に生きることを学ぶ」の四つの柱を教育の基本とすることを提言し、「学校は学習への意欲と喜びとを与え、またいかに学ぶかを学ぶ能力と、知的好奇心を植えつけなければならない」と報告している。これらの答申や報告書によって学校教育の改善が緊急の課題であると捉えるとともに、授業改善の方向性も捉えることができる。

学習指導要領によれば、社会科のねらいは「公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者としての必要な公民的資質の基礎を養う。」とある。しかしながら、社会科の授業実践の現状をみると、「ねらい」に十分にせまることのできる授業となっているか覚束ない面が多い。社会科についての生徒の学習状況は年号や地名、日本や世界の社会や産業などに関する知識や提示された課題を調べる態度は比較的身に付けているが、それらの知識を基に様々な視点から諸地域の特色や歴史的事象などを考察したり、それらを自分なりに考えて意見を述べたりする能力については、十分ではない面もみられる。

このような背景には、教科書に記述されている社会的事象を理解し、覚えることをね

らいとしている授業観がある。このような授業によって生徒が身に付ける学力とは、社会的事象についての知識である。また、学習活動も教師の講義を聞いて、理解するといった受動的な状況が普通である。「ねらい」とはかけ離れた学力となっている。

社会科の授業を通して生徒が身に付けるべき学力とは「公民としての基礎的教養」である。この基礎的教養とは、中教審答申で述べている「生きる力」に相通するものがあるし、ユネスコの報告書の四つの柱とも共通するものがある。それは、従前から社会科の授業で「ねらい」としている「認識に基づく社会的事象についての理解」といった「内容知」とともに、学び方を身に付ける「方法知」を重視する授業観である。「内容知」は受け身の学習活動であっても身に付けることができるが、「方法知」は生徒自身の主体的な学習活動によって初めて身に付くものである。

ブルーナーは「教育の過程」やその他の著書で子供の主体的な意欲、好奇心、思考力などが学力形成の核となることを強調している。「方法知」を身に付けることによって意欲や好奇心を喚起し、思考力を育成することができる。

今回の学習指導要領の改訂にともなって生徒指導要録の改善が行われ、観点別学習状況の評価項目に「関心・意欲・態度」の一項が設けられた。このことは、学習指導要領の総則にみられる「学校の教育活動を進めるに当たっては、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図る」ことへの対応した考え方によるものである。さらには、今日の学校教育は生涯学習に結ぶつく基礎を培うことにあるが、生涯学習社会においては「学ぶ意欲」を持っていることが重要である。生涯学習社会では、何時でも、誰でも、必要に応じて学習することができることを要件としている。必要に応じて学ぼうとする時、学び方を身に付けていることが欠かせない。学び方の基礎を身に付けることは、学校教育が責任をもって行うべきことであろう。

「学ぶ意欲」には「いかに学ぶか」といった「方法知」が大きな要素をしめている。社会科の学習対象となる社会的事象が急激に変化しており、今後の変化は予想できないものがある。そのため、学校で身に付けた学力が日常生活に役にたたないだけでなく、社会科の学習内容そのものが生徒にとってまったく魅力のないものとなっている。学習の成果が自分の生活に生かせる「効力感」に結びつくことが「学ぶ意欲」を育てるためにも重要であるし、社会科の授業を「意欲をもって学ぶ」魅力あるものとするためにも必要である。今野喜清氏は「知的教育にとって最も大事なことは、意欲は単なる内発的動機ではなく、子どもが当面した『課題達成』のプロセスのうちに生起すること、つまり学習対象・課題の質に関係することとしてとらえることであろう。」と述べている。生徒の「学ぶ意欲」をはぐくむためには、学習内容と方法によるところが大きい。

意欲が行動や活動の原動力となることについては、文部省の各教科の指導書でも指摘しているところであるが、生徒にとって「学ぶに値する」学習をいかに成立させるかが大きな課題である。生徒が学ぶ意義を捉えていなければ、学習への意欲はわからない。意欲を喚起するには、学習対象と生徒自身が向き合うことが必要である。特に社会科では、自分の生き方にかかわる教材や社会的事象の中から意識的に学習課題を設定し、課題解決に向けての主体的な学習（方法知）が展開されることから、学習への意欲が形成されるのであろう。「学ぶ意欲」は生徒が直面した課題に自らの学習が展開されることによって形成されるものである。

学ぶとは生徒一人一人の自立の問題である。生徒自身によって課題が発見された学習こそ自立に向けての学習であり、生涯学習社会に欠かすことができない。

## 2 評価の工夫改善

生徒が直面した課題に対応して、生徒が主体的に学習活動を行っている状況における評価は、これまで一般的に行われてきた教師が作成したペーパーテストだけでは困難である。また、教師が設定した到達目標にどれだけ近づいたか、といった評価観でも十分ではない。従前からの評価観によるテストの結果に基づいた相対評価による5段階評価では、かえって学習への意欲を失わせることもある。学習の結果についての評価から、学習過程の評価を重視することが「学ぶ意欲」を評価する上で重要となる。

評価は学習活動について調整したり修正したりする機能が重要なのであって、学習過程で評価情報が学習者に適切にフィードバックされることが大切である。そのためには、教師の評価活動とともに生徒自身が自らを評価することも重要となる。生徒自らの評価によって「できた」といった成就観が得られ、「自分も、ここまでできるんだ」という有能感・効力感をもつことが「学ぶ意欲」には、なによりも重要である。また、学習上の誤りがあっても適切に軌道修正ができ、学習方法の改善も可能となる。

このような評価活動を行うには、教師の授業観の転換を図ることが前提となる。生徒が主体的に学習できる条件を整えることは無論であるが、日頃から生徒が主体的に学習に取り組むことのできる学習活動が必要である。その時間の授業の「ねらい」はどのようなことなのか、どのような学習を行うのか、自分はどうような学習を行えばいいのか、などその時間の学習活動についてのイメージを生徒が描ければ、生徒は意欲をもって学習に参加することができる。これまでのように、教科書の記述内容を解説して終わるような社会科の授業では、生徒が主体的に学習することはできない。

現在の社会科の教科書の記述内容は、社会的事象についての解説や概念の説明が多く、

生徒の課題意識にかかわる記述がなく、生徒が読んでも興味はわからない。なかには、社会の変化に追いつけず陳腐化した内容も含まれている。どうして、そのような解釈が成り立つのか、理論的背景についての記述がないので生徒の知的興味にも対応できない。また、学習方法についての記述がないので、学び方を学習することもできない。教科書には社会科の教科としての特性を生かして、問題解決能力の育成や学び方の育成に資する教材を豊かにする工夫が必要となる。

授業への準備として教材研究が行われているが、従前から行われている教材研究とは、教科書の記述内容をいかに分かり易く説明するかについての研究であったり、何を教えるかについての研究であったりすることが一般的である。しかし、生徒の主体的な学習を支援するための教材研究とは、いかに生徒の興味・関心に訴えることのできる学習課題を教科書の記述内容から探り出すかにある。そのためには、生徒が日頃からどのような社会的事象に興味・関心を持っているかを知ることであり、日常生活の中で生徒に関する情報の集約から教材研究が始まっているのである。

生徒が主体的に活動している授業が展開されていれば、教師の評価活動は比較的やりやすい。それぞれの生徒について、「課題の設定が適切であるか」「学習計画はねらいの達成に適切であるか」「この学習活動でねらいにせまることができるか」などを評価の視点として観察による評価が可能となる。また、教師が得た評価情報を適宜生徒に伝えることによって生徒は自己評価をすることもできる。

「学ぶ意欲」についての評価は、生徒が主体的に学習活動ができるよう授業の質的転換を図ることによって、その内容・方法を開発することができる。

### 3 確かな学力をはぐくむ指導計画の工夫

生徒の「学ぶ意欲」に基づいた学習によって身に付けることのできる学力を確かな学力と捉える。

社会についての知識や理解は自らの学びによって確かな学力となる。授業を通して自らの学びを成り立たせるためには、個人的な学習とともに学びの場としての集団との交流が大切である。

教科書の記述内容に従った指導計画では、生徒の主体的な学習活動を展開するには時間の制約が大きい。生徒が設定した学習課題によって学習活動を展開しようとするならば、そのような学習が成り立つ指導計画は必須となる。

生徒の主体的な学習活動を取り入れた年間の時間配分をどうするか、また、一単位時間をどうするか、学習の場所をどうするか、これらの点について年間を通して指導計画

を立てることになる。その際大切なことは、あまり余裕のないものではなく柔構造の指導計画とすることである。

生徒が直面する課題を重視した学習活動を展開するとなると、これまでのように教室の中で一定時間内で行うことが困難な状況も考えられる。一単位時間の学習活動の展開にもこれまでにない工夫が求められる。教師が主となって指導する場面と生徒の主体的な学習活動の場面との兼ね合いも重要であり、年間の指導計画作成上十分に配慮しなければならない。

また、学習活動で必要となる見学・調査活動や作業的な学習などを取り入れた時間も考慮しなければなるまい。さらには、学校外の人材の活用、地域教材の開発と活用など地域の教育力の導入も必要に応じて指導計画に取り入れなければならない。従前にはない新しい観点にたった指導計画の作成が重要である。

次いで重要なことは、生徒一人一人の個別学習とともに集団学習をどのように取り込んでいくかである。個の学習と集団による学習の組み合わせによって、確かな学力とともに社会性が育成される。

学びの場としての集団は、人間的自立のエネルギーを高めるものとして機能することが大切である。集団の中で磨かれた個性こそ、学校教育で目指している個性と言える。また、学びの喜びを味わうことも確かな学力とするためには重要である。そのためには、学んだことを他の生徒に認めてもらう機会を設定することである。他者の前で、自分の学習成果を表現し、他者から承認を得る。このような体験をもつことは「学ぶ意欲」をはぐくむ上でも欠かせない要件となる。

これからの指導計画には、以上のような活動が可能となる時間的なゆとりをもった柔構造で、個の学習と集団を組み込んだ学習形態、そして表現の機会を設定した多面的な学習活動を想定したものとなることが重要である。安彦忠彦氏が指摘する「新しい知識を能動的に見つけ出し、自分なりに発信する学習」の成り立つ社会科の授業でありたい。

授業の質の改善がなされなければ、生徒の「学ぶ意欲」に結びついた活動はできないし、「学ぶ意欲」についての評価もできない。授業の質の改善を図るためには、生徒の主体的な学習を可能とする指導計画の開発が欠かすことができない。

指導計画の作成上もう一つ留意すべきことは、社会科の指導計画と学校の教育計画との兼ね合いである。

これまでの教科担当者はややもすると、担当した教科・分野の指導計画のみを作成した傾向が強い。

社会科の授業は教科の「ねらい」を達成することにあるが、その前に各学校の教育目

標の実現に結びついたものであることが重要である。そのためには、教科の指導計画に学校の教育目標に結びつく具体的な活動を取り入れる工夫も必要となる。教科担当者は担当教科の経営者であるとともに、学校経営の重要なスタッフの一員でもある。学校経営との兼ね合いの中で教科経営を行うことが必要である。各学校が定める教育目標には学力だけでなく、人格形成にかかわる内容がある。学校の教育活動で最も多くの時間を教科の指導に当てている。教科の時間を通して人格形成にかかわる目標達成の具体的な活動が必要である。そこで、社会科の指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標を達成に結びつく活動を想定した活動を盛り込むことが重要である。

また、これからの教科指導には学校外とのかかわりをどう工夫したものにするか、大きな課題となってくる。教科経営を充実したものとするためには、学校の教育活動全体を見渡す努力が必要となる。教育課程審議会「中間まとめ」（平成9年11月17日）では、「知識と生活との結びつき、知の総合化の視点を重視」することを指摘している。教科の学習で身に付けた学力が生徒の「生きる力」と結びつく、ねらい・内容・活動・方法などについて従前の指導計画を根本的に見直さなければならない。

生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせるには、学校、家庭、地域社会の三者がそれぞれの教育機能を十分に発揮することが必要であり、そのためには、教科担当者として、このことを可能とするコーディネーターとしての資質をもつことが必要である。生徒にとって豊かな学習環境を生み出すことのできる指導計画の作成を期待したい。

#### 4 必修社会科と選択社会科

選択社会科について学習指導要領では「生徒の特性に応じ多様な学習活動が展開」し、「分野間にわたる学習、自由研究的な学習、見学・調査、作業的な学習などの学習活動を学校において適切に工夫して取り扱うものとする。」とある。まさに生徒の主体的な学習活動を期待しているのである。

社会科学学習の今日的な課題としては、学習によって身に付けた学力が生きた学力となっていないことや、学習への喜びを味わっていないことがあげられる。そのためには、生徒一人一人の持っている力を引き出したり、伸ばしたりする学習活動の展開が必要である。また、社会の変化に対応できる学力は今後ますます重視されなければならないが、主体的に判断し行動できる確かな学力を身に付けること、あるいは、何時、どのような社会であっても必要に応じて学ぶことのできる「方法知」を身に付けることが大切である。

選択学習はこれらの学力を身に付ける上で優れた学習活動の場である。必修の時間と



異なって、選択社会科の時間には意欲のある生徒のみが集まっている。生徒の主体的な学習を展開するには最も優れた機会でもある。しかしながら、選択学習の現状には課題も多く指摘されている。それは概ね次の諸点である。

- ・活動のみで、何のための学習か分からないため充実感がもてない
- ・学習方法の工夫が十分に行われず、知的な興味ももてない
- ・教科選択の理由が明確ではないため意欲がもてない

このような課題が生じる背景には選択学習への取り組みについての教師側の工夫が十分になされていないことがあげられるが、選択学習に対する生徒へのガイダンスについての課題もある。また、教師も生徒も選択学習の意義を十分に理解していないことも指摘できる。

選択学習の導入のねらいは、生徒の主体的な学習への取り組みであり、いわば学習への意欲に直接かかわる学習であること、さらに学習の仕方（「方法知」）を身に付けることにある。

選択学習を充実させるためには、日頃から選択能力が育つよう授業の展開となるよう心がけることが必要であり、必修教科の時間においても生徒の主体的な学習活動が行われることである。

生徒に学習への意欲をもたせる社会科の授業とするためには、いかに生徒一人一人の能力・適性に応じた活動を準備できるかが重要となる。主体的に生きていくための資質や能力、自立した個性の育成、そのためにはいかに生徒一人一人の多様な個性を認めることができるか。同質志向や横並び意識をどう改められるか、教師の意識改革が必要であり、個に応じた学習活動が展開できる教師の能力が問われることになる。

生徒一人一人の学習活動を充実したものとするには、これまで以上に生徒一人一人に目を向け、語りかけることが重要となろう。生徒についての理解が深まれば、適切な指導が行われることになる。

（佐野金吾）

#### 〈参考文献〉

- ブルーナー「教育の過程」岩波書店  
ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書 ぎょうせい  
安彦忠彦「学校知の転換」ぎょうせい  
澁澤文隆「中学校社会科 地理の授業改善」明治図書  
中学校学習指導要領（平成元年3月）  
中央教育審議会答申（平成8月7月19日）  
教育課程審議会「中間まとめ」（平成9年11月17日）

## II. 地理的分野

## 1 地理的分野ではぐくむ学力

### (1) “暗記物”からの脱却のために

これまで地理的分野の学習は、ともすると地名・物産を暗記する学習ととらえられがちで、実際、授業において覚えさせる場面やテストにおいて覚えていなければ解けない問題が多いことは事実である。そのため人間の生活の場の特色を扱っているにもかかわらず授業ではあまり人間が登場せず、学習が無味乾燥といった印象を持つ生徒が少なくない。

このような授業に陥ってしまう原因は、ひとつには学習の目標あるいは指針が無批判に教科書に求められることによって、見開き2ページ分の記述が毎時間の授業の学習対象となり、“教科書を”教えることが目的になってしまっていることがあげられる。次に、学習内容そのものよりはビジュアル教材やコンピュータの活用、調べ学習、あるいは一部で行われているディベートやシミュレーションなど、教材の活用や新しい指導法の導入の分野で授業改善は工夫されるようになってきている。しかし、それでも教師主導の一斉授業の形態は依然として主流であり、一人一人の生徒の学習特性に応じた授業、個性伸長のための学習は進んでいないことがあげられる。ただ、欧米に比べ、1学級あたりの生徒数が多いため、一人の教員ではそれらの課題に対応しきれないのも現実である。そして評価に関しては、比較的可視的な認知面における研究や実践は進められてはいるものの、情意面については、研究が進まないなかで、各学校では「観点別学習状況の評価」を具体的に記載しなければならないのである。

評価の最大の問題は、今なおペーパーテストにそのほとんどを依存していることである。ペーパーテストは重要な評価方法の一つであるが、その他の評価法の実践・工夫の例が学校から発信されることは少ない。今後ペーパーテストによる知識・理解以外の観点の評価について、また多くの教師がこれまで意識・無意識に行ってきた評価法である観察法の見直しや、生徒の自己評価や相互評価等についての学校レベルの一層の研究・実践が求められている。

### (2) 学習の価値に気づかせる地理的分野の学習を

授業中、生徒から「それ、テストに出ますか」という質問をされた経験を持つ教員は少なくないはずである。これは、とりもなおさず、生徒がテストに出題されるかそうでないかを授業への参加態度のバロメーターとしているからであり、生徒にとっていかにテストの結果が重大事であるかを物語っている。それは普段の授業の積み重ねが、結局

テストに集約されていくような授業構造になっているからに他ならない。さらに、「難しい」、「わからない」という生徒の声の中には、学習している内容の持つ「意味」がわからない、学習する「意義」を見出せない、という2つの意味が含まれているのではないだろうか。それは学習への意欲を喚起しないばかりか、社会科の学習の必要性さえ問われる重大な問題である。

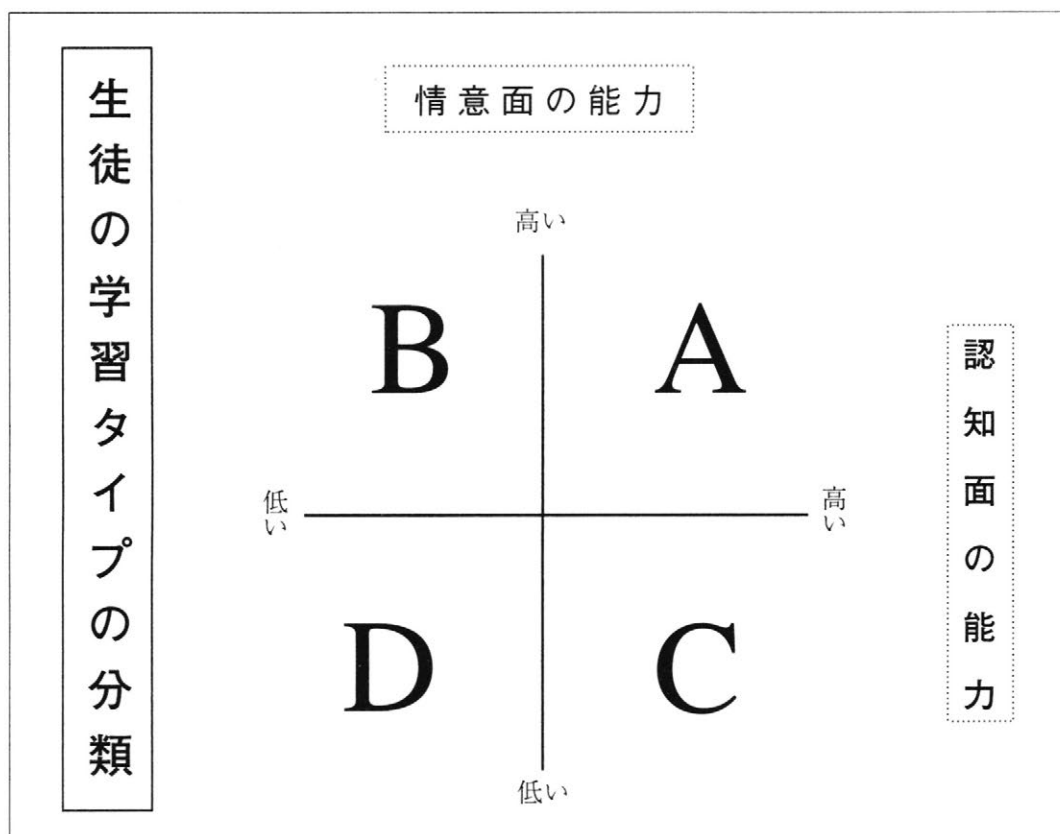
今後、例えば各地域の特徴の結論を教え込むような学習から、様々な資料を用いたり、調査したりする学習活動の中から自ら捉えさせるような学習を工夫することが大事である。ただただ暗記を強いる学習、教科書を教える学習は、事実認識を深める意味がないわけではないが、そこにある内容への疑問を持たせるまでにはなかなか至らず、受け身の学習になりがちで、創造性をはぐくみにくい。科学の進歩は常識を疑い、調べ、試すところから始まった部分が少なくない。

作業的・体験的活動を通して地理的事象の持つ意味までとらえさせることが確かな社会認識を培う。ある地域の特徴が、他の地域とどのようなかかわりを持つのか、また、その特徴がどんな原理、普遍性を内在しているのかに気づき、それが自分や自分の生活する地域とどのようなかかわりをもつのかをとらえることができた時に、生徒は地理学習の意義を感じ、成就感を持ち、次の学習への意欲となる。このようにして様々な地域や社会の複雑な自然的、社会的現象をよく観察し、新しい発見をする喜びや楽しさを味わい、そこにある普遍性に気づき、わかる醍醐味を味わうことこそ本来「地理」が持つ「よさ」ではないだろうか。

### (3) 育てる「関心・意欲・態度」

「関心・意欲・態度」の能力を評価しようとする場合、授業の中でそれぞれの生徒に表出された「関心・意欲・態度」に関する言動が、それがそれぞれの生徒にもとから備わっていたものなのか、授業による学習を通して培ったものなのかをしっかりと見分けて、学習によって培われたものを評価するよう十分注意しなければならない。そのためには「関心・意欲・態度」に関する目標を明確化するとともに、生徒の学習特性に留意しながら指導の筋道を計画的に構成しなければならない。

一方、評価はこれまで一般にあるレベルを想定して目標を決め、そのレベルにそるることを目的に授業が行われ、その結果を評価してきた。しかし、そこでは一定のレベルに到達しなかった生徒は一律に低く評価されることになり、このような評価、評定が果たして生徒の学習意欲や自信に結びつくのかどうかという疑問が残る。「一人一人の個性を伸長する」とか、「学習意欲を持たせる」といった今日の教育課題は、一律の目標、



評価基準で対応できるものではないのではないだろうか。

大切なのは、基本的に一人一人の違いを認め、それに対応した授業を展開することではないだろうか。そこではじめてその生徒ならではの良さが見えてくるし、その良さを伸ばすことが可能になるのである。

そのためここでは、これまでの地理的分野の学習を通して一人一人の生徒を認知面の能力と、情意面特に地理的分野の学習への関心や意欲に着目して、上記のように学級ごとに生徒をA、B、C、Dの4つのタイプに便宜的に分類し、それぞれのタイプごとに「関心・意欲・態度」にかかわる目標をたて、教材を構成し、評価の基準を設定してタイプに応じた評価の工夫を試みた。実際の授業の場面では、40人近い生徒の一人一人の学習特性や個性に応じた対応は困難で、学級内をこのように4つのタイプに分けて対応することの方が、より現実的であると考えます。また、チームティーチングが可能な場合や、1学級の生徒が少ない場合は、上記のA～Dのタイプをさらに細分化したり、別の要素を入れるなどして、より個別化の目的に沿うような形で実践を工夫したい。

#### (4) 日常生活の中からの教材化

子どもの直接体験の不足について、多くの指摘がなされている。そこで、今日の子どもの日常生活に、作業的な学習や、体験的な活動を新たに計画的に組み込んでいこうとするのが教育改革の一つの方向である。また、その中で子どもの日常生活そのものを見直し、その改善を図ったり、その特長を生かすような工夫も、同時に必要ではないだろうか。

すなわち、身の周りの地理的な事象から、生徒が自己との関わりを見出すことができるような題材の開発、また、その題材を通して地理的事象の意味をとらえられ、学習の意義が感じられるような題材の教材化、そしてその教材を通して適切な学習課題を設定し、その課題解決を図る学習、これらを通して生徒に自ら学ぶ意欲と態度が培われると考える。

そして、このようにして学校外での体験を学校の授業の中で生かしたり、その体験の意味や意義を確かめ、理解したり、あるいは学校で学んだ事を学校外の日常生活の中で応用しながら、より認識を深めたりすることが、今日の「生きる力」に結びつくものであろう。

## 2 関心・意欲・態度をはぐくむ授業例

### (1) 教材化の視点

価値観の多様化、情報化の進展等が叫ばれている中であるが、やはり子どもの情報源の大部分はテレビ番組が担っていると考えられる。今や世界中でテレビ番組の視聴が日常生活の定位置を占めているといっても過言ではないだろう。そこで、ここではテレビ番組のうち、世界的にみて、日本人がよく視聴すると言われている「天気予報」に焦点を当てて教材化を試みた。ただ世界の人々の生活の中ではテレビ・ラジオが普及する以前から、日常生活の中で天気、天候に触れることが多く、それだけ天候は人々の生活に密着したものである。日本の中学生の生活に関する部分だけ見ても、登下校時の服装、傘を持っていくかどうか、体育の授業の準備、部活動の活動場所、あるいは遠足や運動会などの学校行事、衣替え期間中の服装、休日の出かける予定など、日本人は多かれ少なかれ天候に左右される生活を送っているということができよう。

そこで、日本の諸地域の学習に入る前に、このような日本人の生活の特色を世界的視野から自然の特色、人々の生活様式や行動の面からとらえさせる学習として「世界から見た日本」の「日本の人々の生活」の単元に位置づけた。

天気予報の番組の内容は、天気図とその変化の様子、降水確率、最高・最低気温を基本に、番組や季節によって湿度（洗濯指数）や紫外線（UV）情報、花粉情報、年中行事、また自然災害への警報を放送している。また、全国の主要都市や、各都道府県をさらに3分割するなど地域区分をして情報の提供を行い、なかには世界の主要都市の天気予報を行っている番組もある。

本研究では新聞のテレビ欄や、実際の天気予報のテレビ番組のビデオ、インターネットによる情報等を手がかりにしなが、日本の気候の多様性を地形や海流、季節風等とかわらせてとらえさせるとともに、気候に合わせて対応する日本人の生活の特色に気づかせることを目的に単元を構成する。（宇野彰人）

## (2) 指導計画

大単元「世界から見た日本」「日本の国土と人々の生活の特色」（第1学年 3学期）

### ① 学習タイプごとの「関心・意欲・態度」に関する目標

- ・Aタイプ 日本人の日常生活における天気予報のもつ意味を認識しようとするとともに、日本の気候の特色や日本人の生活の特色に結びつく学習課題を設定し、積極的に調べ、追求しようとする。
- ・Bタイプ 天気予報に関する何らかの課題を設定し、資料を活用して調べ、追求しようとする。
- ・Cタイプ 天気予報に関連して疑問点やわからない点をあげ、自ら進んで調べ、追究しようとする。
- ・Dタイプ 天気予報に関連して、疑問点やわからない点をあげることができ、それらを調べようとする。

### ② 単元の学習・評価計画（6時間扱い）

	学習内容	学習の活動・形態と評価	指導、評価上の留意点
1	天気予報と自分の生活との関わり  天気予報が人々の生活とどうかかわっ	<p>〈朝刊の「テレビ番組欄」のコピーの天気予報の番組に赤色で下線を引き、気がついたことを発表しよう。〉（個別・一斉）</p> <p>〈どんなときに天気予報を見るだろう。自分の経験を思い出し、ワークシート（資料参照）にまとめてみよう。〉（個別）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机間指導の中で、一人一人のワークシートの内容を観察し、必要に応じて支援する。</li> <li>・発表する場面では、一人一人の発表内容の良い点を積極的に認める。</li> </ul>

<p>ているか具体的にとらえる。</p>	<p>〈天気予報との関わりについて、ワークシートにまとめたことを、一人ずつ発表しよう。〉</p> <p style="text-align: right;">(一斉)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発表した内容を黒板に季節、月、週、日、時の項目でまとめる。</li> </ul> <p>★ A・B・Cタイプの評価の視点</p> <p>天気予報と関わった自分の経験を思い出し、ワークシートにまとめる。</p> <p>[評価の方法]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・机間指導による観察を特に重視する</li> <li>・発言内容による分析</li> </ul> <p>★ Dタイプの評価の視点</p> <p>天気予報と関わった自分の経験を思い出そうと努力する。</p> <p>[評価の方法]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・机間指導による観察を特に重視する</li> <li>・発言内容による分析</li> </ul>	
<p>天気予報の内容や情報</p> <p>テレビの天気予報番組を見て、気づいたことや疑問に思ったことをまとめる。</p>	<p>〈天気予報の内容や天気予報の範囲について確認しよう。〉 (個別)</p> <p>〔天気予報で扱う内容(天気図、降水確率、気温など)や天気予報の範囲(全国、都道府県、予報区)に関する資料を見る〕</p> <p>〈テレビで放送している天気予報の番組をいろいろ見てみよう。そして、気づいたことや疑問に思ったことを、ワークシートにまとめてみよう。〉</p> <p style="text-align: right;">(一斉・個別)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料に関してはわからないところは、個別に補足説明をする。</li> <li>・ビデオテープは一斉に見せるが、繰り返し見たい生徒に対しては、何度でも見るができるようにする。</li> </ul>



生徒が見るビデオテープには、あるテレビ局の天気予報番組を早朝から深夜まで入ったものを用意する。

- ★ Aタイプ  
 の評価  
 の視点
- ◎ 天気予報番組を見て、いくつかの疑問点を見つけ、その理由についても考える。

[評価の方法]

- ・ワークシートの分析を重視する。
- ・机間指導による観察

- ★ Bタイプ  
 の評価  
 の視点
- ◎ 天気予報番組を見て、気づいたことや疑問に思ったことを見つけようとする。

[評価の方法]

- ・ワークシートの分析を重視する。
- ・机間指導による観察

- ★ Cタイプ  
 の評価  
 の視点
- ◎ 天気予報番組を何度も見るなどして、気づいたこと、疑問に思うことを見つけようと努力する。

[評価の方法]

- ・机間指導による観察を重視する。
- ・ワークシートの分析

- ★ Dタイプ  
 の評価  
 の視点
- ◎ 天気予報番組から気づいたことや疑問に思ったことを見つけようとし、天気予報番組を何度も見ようとする。

		<p>[評価の方法]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・机間指導による観察を重視する。</li> <li>・ワークシートの分析</li> </ul>	
3	<p>学習課題の設定と追究</p> <p>天気予報番組から疑問に思ったり、天気予報と関連して調べてみたいと思ったりしたことをもとにして、学習課題を設定する。</p>	<p>〈天気予報番組から疑問に思ったり、または天気予報に関連して調べてみようと思ったりしたことをもとに、学習課題を設定し、学習課題の内容をワークシートに書こう。〉 (個別)</p> <p>(学習課題例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本のことわざから見た日本の気候の特色を調べてみよう。</li> <li>・日常のあいさつの言葉から、日本と外国の気候の特色を比較してみよう。</li> <li>・世界各地ではどんな天気予報をしているか予想してみよう。</li> <li>・日本のおもな気象災害を調べてみよう。</li> <li>・日本各地の学校の夏休み・冬休みの期間はどうなっているか調べてみよう。</li> <li>・日本各地の真夏日、真冬日の日数はどのくらいあるのだろうか。</li> <li>・日本各地の梅雨入り・梅雨明け日はいつ頃なのか調べてみよう。</li> <li>・日本各地の暖房や冷房の必要日数は何日くらいあるのだろうか。</li> <li>・日本各地のさくらの開花日はいつ頃なのだろうか。</li> <li>・日本各地のかえでの紅葉日はいつ頃なのだろうか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習課題づくりでは、自然的条件、社会的条件を切り口として考えるように指導する。</li> <li>・学習課題については、一人一人の発想を大切にす。</li> <li>・学習課題づくりにあたっては、一人一人の関心・意欲に応じて設定できるように配慮する。また、必要に応じて学習課題例を示す。</li> <li>・生徒が学習課題例から選択する場合は、よく相談にのってあげ、本人の考えを尊重しながら決めるように配慮する。</li> </ul>

★  
 Aタイプ  
 の評価  
 の視点

● 興味・関心に基づいて学  
 習課題を設定する。

[評価の方法]

- ・ワークシートの分析を重視する。
- ・机間指導による観察

★  
 Bタイプ  
 の評価  
 の視点

● 自ら学習課題を選択・設  
 定する。

[評価の方法]

- ・ワークシートの分析を重視する。
- ・机間指導による観察

★  
 Cタイプ  
 の評価  
 の視点

● 興味・関心に基づいて学  
 習課題を設定しようと努  
 力する。

[評価の方法]

- ・机間指導による観察を重視する。
- ・ワークシートの分析

★  
 Dタイプ  
 の評価  
 の視点

● 学習課題を選択・設定  
 しようとする。

[評価の方法]

- ・机間指導による観察を重視する。
- ・ワークシートの分析

追究の結果の  
 まとめ

学習課題を調べ、追究し、まとめよう。  
 (個別)

・資料収集について、困  
 っている生徒について

1 NHKテレビ	2 NHK教育テレビ	3 NHK教育テレビ	4 日本テレビ	5 TBSテレビ	6 フジテレビ	7 8 テレビ朝日	9 10 テレビ朝日	11 12 テレビ朝日
5.00 3時55分まで 6.00 4時55分まで	5.00 3時55分まで 6.00 4時55分まで	5.00 3時55分まで 6.00 4時55分まで	4.45 HLEN 4362294 5.00 朝一福天気 49192 5.59 サタデー 6 6.50 サ・フレッシュ	4.50 朝一福天気 2110763 5.25 ヒョウ 110918 5.30 サタデー 8092111 6.50 サ・フレッシュ	5.00 日本ニュース 5.30 朝一福天気 5.59 サタデー 6 6.50 サ・フレッシュ	4.55 朝一福天気 5.00 朝一福天気 5.30 朝一福天気 5.59 サタデー 6 6.50 サ・フレッシュ	4.55 朝一福天気 5.00 朝一福天気 5.30 朝一福天気 5.59 サタデー 6 6.50 サ・フレッシュ	4.55 朝一福天気 5.00 朝一福天気 5.30 朝一福天気 5.59 サタデー 6 6.50 サ・フレッシュ

作業課題

- (1) テレビの番組表の中で、天気予報番組を探して、赤色で囲みましよう。
- (2) テレビの天気予報番組の内容を思い出して、書きなさい。

(3) 天気予報のテレビ番組を見るときはどんな時か、思い出して書いてみよう。



4 ・ 5 ・ 6	<p>学習課題を追究し、調べた内容をまとめる。</p>	<p>★</p> <p>A・Bタイプの評価の視点</p> <p>資料収集や検討そしてまとめにあたって、意欲的に取り組む。</p> <p>[評価の方法]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートの分析を重視する。</li> <li>・机間指導による観察</li> </ul> <p>★</p> <p>C・Dタイプの評価の視点</p> <p>資料収集やまとめに対して努力しようとする。</p> <p>[評価の方法]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・机間指導による観察を重視する。</li> <li>・ワークシートの分析</li> <li>・自己評価の分析</li> </ul>	<p>は、個別に相談に応じる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・CタイプやDタイプに対しては、必要な資料を貸し出し、まとめ方についても支援する。</li> <li>・まとめ方については、とくに指定しない。各自がまとめ方を考え、レポート・新聞・模造紙など、各自が工夫して作成する。</li> </ul>
-----------------------	-----------------------------	--	--

### ③ 単元の評価の視点

- Aタイプ 日本人の日常生活における天気予報のもつ意味を認識しようとし、学習課題の設定では、より高度な内容の学習課題を設定し、積極的に調べ、追究しようとしていたか。
- Bタイプ 天気予報に関する学習の中で、自ら課題を設定し、調べ、追究しようとしていたか。
- Cタイプ 日常生活の中で天気予報について疑問点やわからない点をあげ、自ら調べ、追究しようとしていたか。
- Dタイプ 天気予報について、疑問点やわからない点をあげることができ、それらを調べようとして努力していたか。

#### [参考文献]

森田正光、森朗「10年天気図」小学館

(室木忠雄)

### 3 「関心・意欲・態度」をはぐくむ評価

#### (1) 評価にあたって

生徒の「関心・意欲・態度」をはぐくむ評価とはどのような評価だろうか。生徒にとって、次の学習や生活への意欲づけとなるような評価であることが望ましいだろう。当然、教師が評定をつけるための評価であってはならないし、評価をするために生徒が萎縮してしまうような評価であってもならない。そして、「関心・意欲・態度」をはぐくむ評価を考える場合、授業も工夫することが大切になる。学習内容にしても、生徒にとって切実な生活に根ざしたものを取り上げることが一つの方法と考えられる。例えば、実践事例で紹介した「天気予報」の学習では、テレビや新聞といったメディアを通して天気予報を誰でも一度は強い関心をもってながめたことがあるだろう。このように生徒が誰でも体験したことのある「天気予報を見る」という日常の経験を学習レベルまで高める工夫を行った。このことは家庭生活などの学校外で身につけた知識を学校に生かすといった観点からも重要なことといえる。

授業での評価を考えると、理想としては40人の生徒がいれば、40種類の学習材をつくり、40種類の評価基準を作成し、個に応じた評価を行うことが必要となろう。しかし、現実には難しい。そこで、せめて4種類の学習を考えて、評価の視点を作成し、個に応じた学習を行っていくことが現実的といえるのではなかろうか。ここでいう4種類とは、先述したように認知面の能力の高低をX軸にとり、情意面の能力の高低をY軸として、認知面、情意面がともに高いものをA、どちらとも低いものをDとした。また、認知面が高く情意面が低いものをB、認知面が低く情意面が高いものをCとした。知識を多く持ち、関心や意欲も高いAタイプの生徒と、知識も乏しく、関心や意欲も低いDタイプの生徒とでは、同様の学習材や評価の視点で評価していくことは難しいと考え、このような工夫を行った。

#### (2) 評価の場面と方法

##### ① 1時間目

A～Cタイプの生徒は、関心が高かったり知識があつたりするので、ワークシートにまとめることができるところまで望むが、Dタイプについてはその子どもなりに少しでもまとめようと努力している様子が授業中の観察でみられればよしとした。その際、教師は生徒の学習状況に応じて、適切なアドバイスをを行い、少しでも生徒が意欲的に取り組んでいけるように支援することが求められる。生徒が関心や意欲を高めるように、自分

の生活と関わらせて考えられるようにすることが必要である。

## ② 2時間目

Aタイプの生徒には、テレビの天気予報番組の視聴から疑問点や法則性を見つけさせるだけではなくて、その理由についても考えさせる。Bタイプの生徒には、気づいたことや疑問点を見つけさせる。この2つのタイプの生徒の活動は、ワークシートの分析をすることでとらえる。Cタイプの生徒には何度もビデオを視聴させたり、ヒントを与えたりして気づいたことや疑問に思っていることを見つけさせる。これは生徒の発言などの行動から、教師の観察によってとらえる。Dタイプの生徒では、気づいたことや疑問点を見つけようと、テレビを何度も視聴しようとするようにアドバイスをする。そして、教師が生徒の学習状況を観察でとらえていくことになる。ここでの学習からは、天気予報そのものに関心をもつだけではなくて、そこから疑問点や法則性の発見などができるようになることを目標とする。

## ③ 3時間目

Aタイプの生徒には、生徒自身の興味や関心に基づいて、課題を設定するように励ます。Bタイプの生徒には、自分で課題設定を行わせたいが、できない場合には、課題例を示してそれをヒントに考えさせるようにする。この2つについてはワークシートの分析や学習状況の観察からとらえる。Cタイプの生徒は学習意欲はみとめられるので、その関心を一層喚起し、課題を設定しようとしているかどうかを観察によってとらえる。Dタイプの生徒は、教師の示した課題例から選択し、設定しようとしているかどうかを観察によってとらえる。このようにA、Bタイプの生徒については、ワークシートの分析を中心にその活動をとらえ、C、Dタイプの生徒については、主として観察によってとらえる。

## ④ 4～6時間目

A、Bタイプの生徒は資料ワークシートの分析を中心に資料収集やその検討、まとめを工夫して行っていたかをとらえる。C、Dタイプの生徒は机間指導での観察やアドバイスを中心に資料収集やまとめを意欲的に取り組むように働きかけ、観察からとらえる。

特に、A、Bのタイプの生徒については自分の決めた課題に対して、途中で挫折することなく、教師の支援を得ながら追究することができたか、資料が見つからなかったときに諦めずに放課後や他の方法で資料を集めようと努力するように働きかける。意欲的な生徒であれば、授業が終わっても自分の課題を追究し続けていくことが期待できるだろうし、調べているときの様子にしても「寝食を忘れ」という言葉があるが、まさにそのような様子で調べている状況を予想できる。このような学習に対する姿勢がみられたときに学習に対する関心や意欲がかなり高いと言うことができよう。



発表の方法については、友だちの作品や発表を見たり、聞いたりして、その良さを自分の発表や作品仕上げに取り入れながら、分かりやすく作成したり、発表したりしていたかどうかが評価の視点となる。どの生徒も意欲的な作品作りや発表ができるように教師が支援していくことが必要である。

#### ⑤ 自己評価

生徒の主体的な活動を促し、自主的に取り組ませた学習では、生徒が自分で設定した目標が達成されたかどうかを自己評価させることが必要である。自己評価とは教師の単なる評価手段ではないことは明らかである。生徒にとって、自らを高めていくためのものであるという考え方に立つべきであろう。梶田叡一氏の自己評価の条件の一つには「自分なりの目標や評価基準に照らしての自己評価であること（『教育評価』有斐閣）」が述べられている。そして、これは生徒の反省が自己評価には必要だという安彦忠彦氏の「自分で自分の誤りを知り、それを自分で正すこと、そして教師はその確認をするだけで終わること（『自己評価』図書文化）」という指摘にも通じるものである。次のものは安彦氏の自己評価票（『自己評価』図書文化に所収）の内容構成である。

- |   |                      |
|---|----------------------|
| ア | 学習目標の明記              |
| イ | 学習目標達成のための計画         |
| ウ | 目標達成の程度の基準の明記と達成度の明記 |
| エ | 未達成の部分の明記とその原因の明記    |
| オ | 反省の文章の書き込み欄の設定       |
| カ | 教師のコメント欄の設定          |

以上のことを考慮して、「関心、意欲、態度」を育てる自己評価票を作成し、授業の終わりに実施した。

#### (3) まとめ

評価にあたっては、学習の結果だけではなくて、学習経過を重視しなければならない。学習経過を重視することは、授業のそのときどきに教師からアドバイスをしたり、働きかけたりして関心や意欲を喚起するようにしていくことである。このような教師の活動を考えると、「関心・意欲・態度」の評価がAとならない場合には、教師自身の授業中の生徒への働きかけが不十分だったということになるのではなかろうか。他の評価の観点とは違って、関心や意欲の評価が低いということは、それだけ授業中における教師の支

援が不十分であったということになる。また、結果だけを評価するのでは、次の学習への意欲づけという点から考えると、関心・意欲に低い評価をもらった子どもの場合は次の学習への意欲が低くなってしまわないだろうか。「関心・意欲・態度」の評価は、次の学習への意欲づけとなるように配慮して行うことが重要である。「関心・意欲・態度」の評価は教師と生徒のキャッチボールのようなものであろう。その場で即時にヒントや指示を与え、それに刺激を受けて意欲をもち、更に学習に取り組んでいくというものだろう。

評価の観点の中で、「関心・意欲・態度」を考えた場合、関心や意欲だけを個別に取り上げて評価しても難しいのではなかろうか。関心や意欲は知識や理解、表現力などの他の観点と結びつくことで初めて評価が行われると考えられる。それは知識を多く持つことによって、関心や意欲が出てきたり、自分の調べたことをうまく友だちに表現できたときに成就感や達成感をもち、この次はもっとうまく発表しようといった意欲につながっていくのではないかと考えられる。

(石上和宏)

# 「天気予報」で何が分かるか？

1年組番氏名【    】

- 自分の学習の目標を設定しよう。  
ア  日本の気候の特色や日本人の生活と天気予報との関係を調べる。  
イ  天気予報から課題を見つけて調べる。  
ウ  天気予報について疑問点や分からないことに気づいて調べる。  
エ  天気予報について疑問点や分からないことをあげて自分で使って調べる。

- あなたの課題は何ですか。下に書き、それぞれの課題にそって調べていこう。

アの人＝日本の気候と人々と生活との関係としてはどんなことがあったろうか。

イの人＝天気予報について、どんなことが分かっただろうか。

ウの人＝疑問点や分からないことは何だったろうか。

エの人＝疑問点や分からないことをどうやって調べていったろうか。

\*調べて分かったことを簡単に書こう。

- どこで、どんな資料を集めましたか。できるだけ具体的に書こう。
- あなたは自分の設定した課題を調べ続けることができましたか。
- 友だちの発表からどんなことを学びましたか。また、この次に調べ学習をするときにはどんなことに注意しながら、学習したいと思いますか。思いつくままにあげてください。

### Ⅲ. 歷史的分野

## 1 歴史的分野ではぐくむ学力

### (1) 歴史的分野ではぐくむ学力と「関心・意欲・態度」との関連

歴史的分野で求められる学力については、すでに前回の調査研究（平成8年3月「調査研究シリーズ28 中学校社会科における評価教材の開発」）で明らかにしたように、我が国の歴史を多角的に見、そこから現代社会を見つめ直す能力（歴史的な見方・考え方）である「歴史的思考力」とし、これを育てるための学習と評価についても具体例をあげ述べた（同冊子35頁）。しかし今回の研究では前回以上にさらにこの学力をより豊かに育成する学習のあり方を追究することとなった。

学習指導要領によるまでもなく、これからの学校教育は生涯学習社会の到来を見据え、生涯学習の基礎を培う視点をもった学習を各教科・領域で行わなくてはならない。さらに、先の第15期中央教育審議会（以下「中教審」とする）では、「生きる力」として「社会性の育成」をもふくめた生涯学習の基礎の育成を学校教育に求めたことは記憶に新しい。こうしたことは、学校が子どもの人格を形成していくなかで「自己実現」の図れる子どもの育成を目標とし、そのために「自己教育力の育成」「基礎的・基本的事項の徹底」「個性の重視」そして「社会参加」を基本方針として授業をはじめとする教育活動を行っていかねばならないことを示唆している。

これらの基本方針を配慮しながら、新しい授業の創造を図るためのキーワードとなるのが「関心・意欲・態度」なのである。なぜなら、「自己実現」を図れる子どもにとって必要な資質・能力として認知的目標である「思考・判断力」「技能、表現力」「知識、理解力」があるが、これらをはぐくむ上で密接な関係にあり中心に位置しているものが情意的目標である「関心・意欲・態度」だからである。

欧米においては我が国でいうところの「自己教育力」（欧米ではメタカグニション＝自己効力感とよぶ）と「関心・意欲・態度」の関係について、「関心・意欲・態度」が高まれば生徒が独立した学習者として行動する、すなわち自己教育力の獲得を促すことになるという立証がすでに行われている。言い換えれば、「関心・意欲・態度」が高い生徒は自らの学習活動をコントロールする能力（我が国では「自己教育力」、欧米では「メタ認知能力」）が高いということになる。ここでいう自己教育力の高い生徒とは、①学習の主体者は自分自身であるという意識をもち、②自ら問題点を発見し、③これを解決するための適切な方法を見つけることができ、④結果を課題に照らして評価し、⑤必要があれば修正していくことができる者をいう。したがって、「関心・意欲・態度」の育成を中心とした学習の展開を図れば子どもの自己教育力を高め、自己実現を図れる生涯学習の基礎を培うこととなるのである。そこで歴史

的分野においては、「関心・意欲・態度」のうちとくに意欲（学習意欲）に焦点を絞りこれを高める学習と評価のあり方について考察し、歴史的分野ではぐくむ学力である歴史的思考力をより高め自己教育力を育成・向上するための研究実践を行った。

## (2) 歴史的分野における「関心・意欲・態度」とは

「関心・意欲・態度」をはぐくむ学習と評価について考察する前に、歴史的分野における「関心・意欲・態度」について定義したい。

歴史的分野における「関心・意欲・態度」については、文部省が平成5年に発行した「作業的、体験的学習の充実—社会科における学習指導の工夫と評価—」の観点別評価の基準について述べた部分が参考になる。それは、「我が国をめぐる歴史的事象に関心をもって学習に取り組んでいるか、原因、経過、結果、影響などを意欲をもって追究し、現在に伝わる文化遺産を尊重する態度が身についている」とあり、さらに整理すると、歴史的分野における「関心・意欲・態度」とは、

- ・「関心」……歴史的事象（歴史的事実、遺跡、遺物など）と自分とのかかわりについて関心をもつこと。
- ・「意欲」……歴史的事象の原因、経過、結果、影響について自分とのかかわりのなかで意欲的に考察し判断し理解しようとする事。
- ・「態度」……「意欲」をさらに態度化すること。また、その結果、文化遺産を尊重することを態度化すること。

と定義することができる。

## (3) 意欲をはぐくむ学習と評価とは

こうした理念を授業レベルで実践するとなるとどのような授業が考えられるであろうか。鈴木秀幸氏（静岡県立島田高等学校教諭）によれば、これからの学習は「知識を単に受け取るのではなく、学習者が受け取った知識や情報の示す意味との対立や一致などの比較検討を通じて、新しい知識構造を自ら作り出していくこと」（「深い学習（=Deep Learning）」と考え、学習者である生徒自身が知識のもっている意味を分析、評価し、これを特定の課題や問題解決に応用するよう教師は授業の展開を図るようにしなくてはならないとしている。さらに、「生徒が自ら自分の知識構造の問題点や新しい課題を見つけ、その改革や解決のための戦略を考え実行していくことができるよう」教師はそのためのよき支援者とならなければならないとしている（日本教育評価研究会「指導と評価」1996年11月号）。また、こうした学習が継続的に成立していくためには、学習指導に対する評価の在り方が重要なポイントとなって

いくと考えられる。つまり、これからの評価は評価者が支援とそれに対する反応という形で生徒と相互交流しながら評価していくという動的な評価が必要であるという新しい評価観を教師がもたなければならないとしている。このような学習と評価活動を通して、生徒は学習や社会生活に対する「関心・意欲・態度」を形成し高めていくものと考えられる。中教審ではとくに学習意欲を高める学習の一方法として「問題解決的な学習」や「体験的な学習」をあげている。要は、生徒が学校での授業を通しさらに自分なりに深く追究してみたいとか、違う視点から学習してみたいといった、生徒一人一人から新たに発生した個々の関心・意欲を生かしていく学習となるような発展性をもった学習（評価活動を含む）が、これからの授業において求められる姿ではないだろうか。なお、生徒の主体的な学習活動や教師の動的な評価活動を授業において構成・展開する際、教師は生徒一人一人の過去の生活体験や学習体験を事前に十分把握し教材化を図ることが必要である。

それでは、社会科において意欲を形成し高める学習とはどういったものが考えられるのであろうか。鈴木氏の考え方からすれば、問題解決的な学習のうち、「試行錯誤的な学習」や身近な地域の素材を教材化する学習などが考えられる。前者の場合、地理的分野や公民的分野で行われるシミュレーションを取り入れた学習などがその典型だが、文部省がいうところの「現実世界の様々な構造を抽象化・単純化して考え出した教材を基に、生徒がいながらにして現実世界に近い世界を模擬的に作り出し実感」し「法則を自分で見つけ、自分で検証しようとする」（文部省「作業的、体験的な学習の充実」平成5年6月）ことはまさに「深い学習」の具現であり意欲を形成し高めていく学習にはほかならない。後者については、三分野の学習においてよく行われるものであるが、題材そのものが生徒がすでにある程度知識としてもっているものであり、新しい情報が蓄積されているものでもあって、教師の支援によっては比較検討ができ、生徒一人一人が独自の新しい知識構造を建設できる要素をもった学習である。さらに、この学習には生徒が地域社会などに出ていく授業という要素もあり、この学習によって知識や能力の育成のみならず社会参加・社会貢献という態度化を図ることも予想される。あらためてこの学習の長所をあげてみよう。

- ① 身近に社会的事象が存在しているため、自分の生活とのかかわりについて考えることができ地理的・歴史的な見方・考え方を育成するのに有効である。
- ② 身近な地域の社会的事象から我が国や世界の社会的事象について考えることができ、帰納的な思考力が育成される。
- ③ 身近な地域を理解する学習を通し、郷土に対する愛情と文化遺産を尊重する態度が育成される。
- ④ 生徒が身近な地域へ出て調査等を行ったり、地域の人材を活用する学習が予想されるた

め、いわゆる「開かれた学校」づくりが行われ、生徒に広い視野を身に付けさせることになり豊かな人間形成が図れる。

つまり、身近な地域の素材を教材化した学習を行うことは、対象となる時代や歴史的事象に対する生徒の関心・意欲が高まり歴史的思考力がより豊かにはぐくまれるだけでなく、自己教育力や基礎的・基本的事項の習得、個性の伸長、そして社会参加への態度化といった生涯学習の基礎を培うことが期待される。そこで歴史的分野では、生徒の「関心・意欲・態度」を高める学習として、身近な地域の素材を教材化する学習に焦点をあて教材開発を行った。とくに、上記の長所を教材化の視点として積極的に取り入れた。なお、評価については、教師が生徒と相互交流（生徒間交流も含む）しながら評価するという考え方を重視し、かつ生徒一人一人の個性を生かし生徒主体の学習展開が予想できるというこの学習の特色から、生徒の自己評価と生徒間の相互評価を中心とした評価活動を取り入れることとした。

事例1は、身近な地域の地名を切り口にして地域の歴史の移り変わりについて調べ、さらにそこから当時の我が国の歴史や世界の情勢について考えさせる学習である。地名の変化が中央と地方の政治とのかかわりに密接な関係があったことは周知の事実である。ここでは、課題解決学習（個別とグループの2段階方式）の手法をとり、地域調査、発表会といった作業的・体験的学習も入れながら学習展開を図った。さらに、個別学習とグループ学習の合間に自己評価と相互評価を導入し、生徒が自分の学習のフィードバックをすることでより深い学習ができるよう評価の工夫も行った。また、教師が行う評価については、各時間において評価の観点・基準を設け形成的な評価を行うほか、生徒の自己評価などを参考にした。

事例2は、自校の校歌の歌詞にみられる地域の歴史に着目させることにより、当時の地域の様子や我が国の歴史とのかかわりについて考えさせる学習である。校歌には学校を設立した行政の考えや地域の人々の思い・願いが残されているだけではなく、当時の地域の様子も描かれていることが多い。さらに中学校の場合、その歴史が比較的浅いことから学校設立当時の様子を知っている人材や資料が地域にまだ多く残っている可能性が高い。ここでは事例1同様、課題解決的な学習（個別とグループの2段階方式）の手法をとったが、2回目の学習で現在の地域の事象からもう一度過去を振り返り地域の特色について考えるという学習展開を図った。また、地域の人材を有効に活用することも行った。さらに事例1同様、個別学習とグループ学習の合間に自己評価と相互評価を導入し、生徒が自分の学習のフィードバックをすることでより深い学習ができるよう評価の工夫も行った。また、教師が行う評価については、事例1同様、各時間において評価の観点・基準を設け形成的な評価を行うほか、生徒の自己評価などを参考にした。

(細谷美明)



## 2 意欲をはぐくむ授業例

### 【事例1】身近な地域の地名のおこりから発展させた歴史学習

#### (1) 教材化の趣旨

この学習は、身近な地域の地名の変遷の学習を通して地域がどのように発展・変化しているか考え、自分の住む地域を大切にし、身近な地名や文化、歴史を尊重する態度を育成することをねらいとしている。この学習を通して身近な地域が日本や世界の歴史的発展と深く関わっていることを知り、日本や世界の歴史的事象を学習する場合にも、その歴史的事象を身近なものとして感じ、歴史学習に対する興味や関心を高めることができると考える。

身近な地名を考える中で生徒の関心を距離的な広がりや時間的な広がりをどう拡大していくかは、授業の中での教師の働きかけが大きいと考える。しかし、疑問の発見や課題設定にあたっては生徒の興味や関心を大切にするように配慮し、教師の押しつけにならないよう配慮しなければならない。

本事例は、杉並区の成立の過程を調べることから東京都の成立の過程を考え、東京都の成立の歴史的背景や国際的な位置づけを考えさせ、当時の人々の思いを実感させる学習である。この学習は、「大正デモクラシーと文化の大衆化」「第二次世界大戦と日本」の学習との関連を図って授業時間を設定することが考えられる。

#### (2) 目標

- 身近な地域の地名の変遷から身近な地域の歴史の発展に興味をもつことによって、生徒の主体的な学習を促し、自ら学ぶ意欲を高める。
- 生徒の身近な地域である杉並区の歴史が東京都の発展と深く関わり、日本や世界の動きとも密接な関係があることに気づかせ、近代の都市の発展と市民の生活を考えさせる。

#### (3) 指導計画（6時間扱い）

授業の主題と目標	おもな学習活動・形態、評価	指導・評価上の留意点
杉並の地名を調べよう  杉並区の地名を考える中で、学習課題を見つける。	○「明治時代の杉並」「江戸時代の杉並」の地図を見ながら考える。 [一斉・個別] →「江戸時代の杉並」に示されている地名は「明治時代の杉並」の四か村のどの村に属しているか調べてみよう。 →1969（昭和44）年の住居表示実施による現在の地名と較べてみよう。	● 自分の住んでいる身近な地域の地名に興味をもたせ、人々の生活を考えさせるようにする。

疑問を出し合  
おう  
疑問に思うこ  
とを出し合う。

解決への見通し  
疑問を解決す  
るための方法  
を考える。

**関** 課題を受けとめ、疑問をもち自主的に追究しようとする。

(観察、作業への取り組みの様子)

○疑問に思うことを出し合う。[一斉・個別]  
→短冊にまとめる。

なぜ、杉並というんだろう。  
いつ、杉並区となったんだろう。  
なぜ、東京だけ「都」というんだろう。  
「東京府」と呼ばれていた頃もあったが、いつ変わったのんだろう。

**関** 興味をもち、疑問点をまとめている。  
(作品評定、短冊の分析)

○疑問を解決するためにはどのようなことを調べればよいか。 [一斉・個別]

杉並区内の地名の由来を調べる……A  
杉並区ができるまでの経過をまとめる…B  
杉並区ができたころの東京を調べる  
東京の区域の変化を調べる……C  
人々の生活の様子を調べる……D  
都市としての東京の発展を調べる……E  
このころの世界の様子を調べる……F  
東京都ができるまでの経過をまとめる…G

**関・思** 自主的に追究しようとする。み

●自由に考えさせる中から、時間的、空間的に興味が広がるように働きかける。

●課題を発見できるように一人一人の考えを大切にしながら援助する。

		<p>んなから出された疑問を整理し、自分の課題を設定をする。</p> <p>(観察、発表の様子や内容)</p>	
2	<p>研究方法の考察</p> <p>グループ分けと研究の方法を考える。</p>	<p>○グループ分けをする。 [一斉]</p> <p>○グループごとに研究の方法を考える。 [個別]</p> <p>○個人で調べる課題を分担する。 [個別]</p> <p><b>関</b> 自主的な取り組みをし、自分の役割を自覚している。</p> <p>(観察、発言の内容、自己評価の分析)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●個人の興味を大切にしながらグループ分けをする。</li> <li>●個の研究のまとめりとしてのグループの研究であることを自覚させる。</li> </ul>
3・4	<p>学習課題の追究</p> <p>学習課題を追究する。</p>	<p>○個人の課題、グループの課題を協力しながら調べ課題を解決し、発表の準備をする。 [個別]</p> <p><b>関・技・思</b> 必要な情報を選択し、分かりやすくまとめている。</p> <p>(観察、作業状況、発表用紙)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●うまくまとめられない生徒には、まとめ方を具体的に示す。</li> </ul>
5	<p>発表とまとめ</p> <p>追究したことを発表し、学習課題をまとめる。</p>	<p>○各グループごとに課題の発表を行う。 [一斉]</p> <p>○疑問に思ったことが解決できたか確認する。 [個別]</p> <p><b>技・思</b> 課題についての的確な資料を使って分かりやすく発表する。</p> <p>(観察、発表の様子、自己・相互評価の分析)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●発表の内容が他のグループの生徒に理解できるよう、分かりやすい発表となるよう工夫させる。</li> </ul>

6	<p>○発表を聞いて考えたこと、自分で調べて考えたことをワークシートにまとめる。 [個別]</p> <p>○新たに調べたいと思うことを出し合う。 [一斉]</p> <p><b>関</b> 発表の内容を生かして新たな学習課題を見つける。 (作品評定、まとめ文の分析)</p>	<p>●「明治前期測量地図」を示し、当時の杉並の様子を考えさせるヒントとする。</p>
---	--	---

#### (4) 授業記録と自己評価（相互評価も含む）

課題を設定して調査する活動を取り入れた学習や選択学習の時は、各時間のはじめと終わりに授業記録を書いて提出する。その時間の学習内容にあったものを工夫し、自己評価や相互評価を行い、教師の評価に生かすようにする。 (岩谷俊行)

#### 授 業 記 録

#### 年 組 番 氏 名

月日	本時の目標	活 動 内 容	反 省	目標達成度	今日の評価
6/25	みんなの発表を聞く ～テーマ～ ○○○○ について	発表を聞き、重要な点はメモをする。	声が小さく、はっきり聞こえなかった。	A	A
			途中でしゃべってしまった。	B	B
				C	C
班の発表について テーマ _____ 発表内容 ..... 疑問に思ったこと ..... 評価 発表の態度 A B C      資料の活用について A B C 発表の方法 A B C					

〈資料〉

### 江戸時代の杉並



### 明治時代の杉並



『わたしたちの杉並』（杉並区教育委員会）より

## 新東京市域と35区



## 新市域20区の概要

	市域編入町村名	新区名	区役所所在地
荏原郡	品川町、大崎町、大井町 目黒町、碑森町 荏原町 馬込町、東調布町、池上町、入新井町、大森町 矢口町、蒲田町、六郷町、羽田町 世田谷町、松澤村、玉川村、駒沢町	品川区 目黒区 荏原区 大森区 蒲田区 世田谷区	品川町・現品川町役場 目黒町・現目黒町役場 荏原町・現荏原町役場 大森町・現大森町役場 蒲田町・現蒲田町役場 世田谷町・現世田谷町役場
豊多摩郡	渋谷町、代々幡町、千駄ヶ谷町 大久保町、戸塚町、落合町、淀橋町 中野町、野方町 和田堀町、杉並町、井荻町、高井戸町	渋谷区 淀橋区 中野区 杉並区	渋谷町・現渋谷町役場 淀橋町・現郡病院付近 中野町・現中野町役場 杉並町・現杉並町役場
北豊島郡	巢鴨町、西巢鴨町、高田町、長崎町 滝野川町 南千住町、三河島町、尾久町、日暮里町 王子町、岩淵町 志村、板橋町、中新井村、上板橋村、練馬町、上練馬村、赤塚村、石神井村、大泉村	豊島区 滝野川区 荒川区 王子区 板橋区	西巢鴨町・現荒玉水道町村組合役場 滝野川町・現滝野川町役場 三河島町・現三河島役場 王子町・現王子町役場 板橋町・旧北豊島郡役所
南足立郡	千住町、西新井町、江北村、舎人村、梅島町、綾瀬村、東洲江村、花畑村、淵江村、伊興村	足立区	千住町・旧南足立郡役所
南葛飾郡	香爐町、隅田町、寺島町 亀井戸町、大島町、砂町 金町、水元村、新宿町、奥戸町、本田町、亀青村、南綾瀬町 小松川町、松江町、葛西村、瑞江村、鹿本村、篠崎村、小岩町	向島区 城東区 葛飾区 江戸川区	寺島町・現寺島町役場 大島町・現大島町役場 本田町・現本田町役場 小松川町・旧南葛飾郡役所

『新修 杉並区史』（杉並区史編纂委員会）より

## 【事例2】 校歌に表現された身近な地域の歴史

### (1) 教材化の趣旨

小・中学校の校歌には、学校がつくられた頃の様子や、その地域の歴史が表現されていることが多い。生徒が一度は口にしたことがある校歌に着目させ、そこに表現された身近な地域の歴史を学習させることによって、生徒の関心や意欲を高めさせることができると考える。

本事例は、東京都北区の堀船・昭和町地区を教材化したものである。北区立堀船中学校の校歌には“近代の大工業地”という歌詞があり、この歌詞から生徒の身近な地域である堀船・昭和町地区の明治から昭和にかけての工業化を学習させることによって、日本の近代工業の発展をとらえさせることをねらいとした。また、この学習では、生徒が校外に出て行って聞き取り調査、施設訪問などにより資料を収集したり、さまざまな人と交わることによって地域との交流も図ることができ、「開かれた学校づくり」が可能であると考え。単元は15時間扱いとし、9時間目以降は発展的な学習として位置づけることにした。

### (2) 目標

- ・校歌という生徒によって身近な素材を活用して、身近な地域の歴史を学習させることによって、生徒の主体的な学習を促し、自ら学ぶ意欲を高める。
- ・生徒が地域に出ていったり、地域の人材を活用したりすることによって、地域を愛する気持ちや態度を育てる。
- ・生徒の身近な地域である北区堀船・昭和町地区周辺の歴史を通して、明治から昭和にかけての日本の工業化の発展をとらえさせる。

### (3) 指導計画（15時間扱い）

	授業の主題と目標	おもな学習活動・形態、評価	指導・評価上の留意点
1	校歌に注目しよう 校歌の歌詞や地域の人の話から校歌がつくられた頃の様子に関心をもたせる。	○校歌を歌い、歌詞に注目する。 [一斉] ♪近代の大工業地♪♪商工の栄ゆくところ♪ ○地域の人（卒業生）を招き、校歌がつくられた頃の様子について聞く。 [一斉] <b>関</b> 地域の人のお話を熱心に聞き、自分なりの関心や疑問をもっている。 (観察、感想文の分析)	●小学校の校歌に着目させる。 ♪くるま走り♪ ♪工業さかえ 競うとき♪ ●話す内容について事前に打ち合わせを行う。

2	<p>学習課題を設定しよう 興味・関心に応じて適切な学習課題を設定する力を育てる。</p>	<p>○前時までの学習をもとに学習課題を設定する。 [個別、グループ] “堀船・昭和町地区はほんとうに近代の大工業地だったのだろうか” 【予想される学習課題】 A いつごろから大工業地になったのか。 B なぜ工業がさかんになったのか。 C どのような工業がさかんだったのか。 D 工業地はどのあたりに広がっていたのか。 E どのような人々の努力があったのか。 F この頃、日本はどのような時代だったのか。</p> <p>【関】 前時の学習を生かし、積極的に学習課題を設定している。 (観察・課題の分析)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●同じような課題を設定した生徒同士でグループをつくる。</li> <li>●なるべく個人の課題を生かすようにし、人数調整は行わない。</li> <li>●適切な課題を設定していない生徒には助言をあたえる。</li> </ul>
3 4 5 6	<p>学習課題を追究しよう 課題を追究することによって、資料活用・表現力を高める。</p>	<p>○資料の収集・検討を行う。 [グループ] ○次時の発表会に使用する資料と発表用原稿を作成する。 [グループ 個別]</p> <p>【関・資】 グループで協力し、ねらいにそって、意欲的に資料を収集し検討している。 (観察、自己評価の分析) 【関】 適切な資料を収集し、それらを発表用資料や原稿に的確に表すことができる。 (観察、発表用資料・発表内容の分析)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●現地調査、施設訪問、聞き取りなどを行って、資料を収集させる。</li> <li>●聞き取りが必要な場合は依頼書を渡す。</li> <li>●各グループとも発表は自由とする。</li> <li>●自己評価票には次の活動への改善となるようなことを書く。</li> </ul>



7 ・ 8	<p>地域の人を招いて課題を発表しよう</p> <p>各グループの発表を通して、日本の近代工業の発表について理解させるとともに、地域の人との交流を図る。</p>	<p>○学習課題について発表する。 [グループ]</p> <p>○他のグループの発表を聞いて、質問事項や意見をワークシートに記入する。 [個別]</p> <p>○地域の人への補足説明を聞く。 [一斉]</p> <p>○地域の人への感想や意見を聞く。</p> <p><b>関・資・知</b> 自分のグループの課題について適切な資料を使って要領よく発表することができる。</p> <p>(観察、発表内容、自己・相互評価の分析)</p> <p><b>関</b> 他のグループの発表を熱心に聞き、適切な質問をしている。</p> <p>(観察、自己評価の分析)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●発表会場は地域の区民センターを利用する。</li> <li>●発表の中に地域の人への説明や質問を取り入れたりする。</li> <li>●相互評価票はグループで話し合ってから作成する。</li> </ul>
9 ・ 10 ・ 11	<p>現地調査から堀船・昭和町地区の今後の課題をみつけよう</p> <p>身近な地域に対する関心を高めさせるとともに調査・記録し、まとめる力を育てる。</p>	<p>“近代の大工業地であった堀船・昭和町地区はどのように変わったのだろうか”</p> <p>○現地調査を行い、新たな学習課題を設定し、それを追究する。 [個別]</p> <p><b>【予想される調査項目】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の町工場</li> <li>・堀船団地</li> <li>・梶原銀座</li> <li>・キリンビール工場</li> <li>・高速道路</li> <li>・隅田川</li> </ul> <p><b>関・資</b> 第7・8時の発表内容を生かして適切な学習課題を設定している。</p> <p>(観察、発表内容、自己評価の分析)</p> <p><b>関・資</b> 調査のねらいにそって意欲的に調査を行い、調査結果を的確にまとめている。</p> <p>(観察、発表用資料、自己評価の分析)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●各自計画書を作成させ、現地調査が必要な場合はルートマップを作成させる。</li> <li>●発表用資料や発表の方法については個人にまかせる。</li> <li>●各自が設定する課題は、前の学習をいかに生かしているかどうかを分析する。</li> </ul>

<p>12 13</p>	<p>堀船・昭和町地区の今後の課題についてみんなで考えよう 各グループの発表や討論を通して、身近な地域の課題について考えさせる。</p>	<p>○学習課題について発表する。 [個別]</p> <p><b>関・資・知</b> 第7・8時の学習を生かして課題について適切な資料を使って、要領よく発表することができる。 (観察、発表内容、自己・相互評価の分析)</p> <p>○発表を受けて、“これからの堀船・昭和町地区はどうあるべきか”について自分の意見をまとめる。 [個別]</p> <p>○まとめた意見をもとに討論を行う。 [一斉]</p> <p><b>関</b> 発表をもとに、根拠を明確にして自分の意見を書くことができる。(意見の分析)</p> <p><b>関・資・知</b> 積極的に話し合いに参加し、相手の意見を聞いて、意欲的に討論している。 (観察、自己・相互評価の分析)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自分が調べた項目について、今後の課題を中心に発表させる。</li> <li>●討論の司会は教師が行う。</li> </ul>
<p>14 15</p>	<p>学習のまとめをしよう</p>	<p>○自分で調べたことについてまとめる。 [個別]</p> <p><b>関・資・知</b> 意欲的に作業に取り組み、これまでの学習成果を的確に作品に表すことができる。 (観察、作品、自己評価の分析)</p> <p>○学習全体を通じての感想文を書く。 [個別]</p> <p><b>関</b> 学習全体を意欲的に活動しており、さらに意欲的な活動が期待できる。 (感想文の分析、今後の活動の観察)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●冊子づくり、VTRづくり、新聞づくり、歌づくりなど、まとめ方は個人の自由とする。</li> <li>●一般的に、校歌には学校がつくられた当時の地域の様子が描かれていることを説明する。</li> </ul>

自己評価（相互評価を含む）

## 自分の活動をふりかえって

組 班 氏名 \_\_\_\_\_

訪問した場所

1 訪問先でインタビューなどの取材がうまくできましたか。

ア うまくできた。

イ うまくできなかった。

理由

2 計画書にそって適切な資料を収集できましたか。

ア 収集できた。 収集したおもな資料 \_\_\_\_\_

イ 収集できなかった。

理由

3 前時に作成した計画通り班員でうまく仕事を分担できましたか。

ア 分担できた。

イ 分担できなかった。

理由

4 資料収集・取材活動を行っての感想や次時への課題などを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

先生から

## グループの活動をふりかえって

～第7・8時 学習課題を発表しよう～

年	組
---	---

【他のグループの活動】 \*グループで話し合って記入しましょう。

\*発表を評価する観点

- ①・・・発表はよく聞き取れましたか。
- ②・・・発表の内容はよく理解できましたか。
- ③・・・発表の時に使った資料はよかったですか。

班	学習課題	発表の評価	感想・意見 (よくわかった点、興味をもった点、よくわからなかった点)
		A・B・C A・B・C A・B・C	
		A・B・C A・B・C A・B・C	
		A・B・C A・B・C A・B・C	
		A・B・C A・B・C A・B・C	
		A・B・C A・B・C A・B・C	

【自分のグループの活動】 \*グループで話し合って記入しましょう。

①大きな声でわかりやすく発表ができましたか。

ア 発表できた イ 発表できなかった

[理由]

②発表用資料を有効に使って発表ができましたか。

ア 発表できた イ 発表できなかった

[理由]

③計画通り発表時の仕事をうまく分担できましたか。

ア 分担できた イ 分担できなかった

[理由]

④他のグループに質問することができましたか。

ア 質問できた イ 質問できなかった

( 回)

[理由]

⑤グループとして発表活動の感想や次時への課題などを書き、評価してみましょう。

[評価] A・B・C

.....

.....

.....

.....

先生から	
------	--

## 堀船中学校校歌

- 一、東京の光あつめて 人はみな  
若々し ここ堀船 堀船  
— 近代の大工業地  
燃えあがる 若き力と  
みな共に ここに築きし  
堀船 堀船 堀船 中学校
- 二、荒川のいのちあふれて 人はみな  
清々し ここ堀船 堀船  
— 近代の大工業地  
すこやけく 強き意志もて  
みな共に ここに学びし  
堀船 堀船 堀船 中学校
- 三、学問に粋をあつめて 人はみな  
賑々し ここ堀船 堀船  
— 近代の大工業地  
商工の 栄ゆくところ  
みな共に ここに育たん  
堀船 堀船 堀船 中学校

## 堀船小学校校歌

- 校 歌
- 土岐 善磨 作詞  
平井康三郎 作曲
- くるま走り 人ゆくところ  
正しい道を ふみて通えば  
おおぎりいちよう みどりあかるく  
平和の空に 雲高し  
春はさくらのあすか山に  
希望の花も さき満ちて  
まなぶ心に さすひかり  
秋は荒川 波ゆたかに  
工業さかえ 競うとき  
はげむ力に 意気あがる  
たがいに親しくみな健やかに  
われらの 堀船小学校

### 3 意欲をはぐくむ評価の工夫

身近な地域の素材を教材化した学習が生徒の意欲を高めること、その学習において教師と生徒との相互交流（生徒間交流も含む）を中心とした評価活動が意欲を評価するだけでなく、意欲をさらに高める効果があることについてはすでに触れた。また、その学習展開や評価活動についてはこれまで事例を通し紹介したところである。ここでは、とくに歴史的分野における身近な地域の教材化した学習と「関心・意欲・態度」を測り高める評価として、生徒による相互評価と自己評価の在り方について焦点を絞り述べてみたい。

#### (1) なぜ生徒による評価が必要なのか

「関心・意欲・態度」を高める学習において、生徒間の相互評価も含む自己評価がなぜ必要なのであろうか。これまでの事例を通し述べてみよう。

事例1・2では、身近な地域の素材を教材化し課題解決的な学習の展開を図ったが、これらの学習に共通していることは、生徒一人一人が学習を単なる作業学習として終わることなく明確な目標を設定しその目標に向けて学習活動を展開してきたことである。その結果、生徒の意識の中に知識の累積ではなく知識構造の変革が起こることが予想される。しかし、学習時間や活動状況などの外的な変容はわかるとしても、このような生徒の精神的な変容は詳しく教師が知ることはできない。したがって、その変容を知るために生徒の自己評価が必要となるのである。

また、これまでの事例は学習の過程から結果までを自分で考え創り上げていくことが必要である。そのために、自分の今の状況がどうであるかの自己評価が必要であり、その内容によって学習活動を学習目標に照らしながら修正していくことができる。

さらに、過去多くの学校で行われてきた、課題を教師が提示し生徒が解決するといった生徒の非主体的な課題解決学習では本当の意味の「関心・意欲・態度」が育成されず、自分で人生の目標を見つけ自分自身を公正に判断する「自己評価力」も育たない。以上のように、生徒の「関心・意欲・態度」を測りそれを高めるためには自己評価が必要なのである。

#### (2) 自己評価の方法と実践

これまで述べてきたことから自己評価とは教師の単なる評価手段でないことは明らかであろう。それは、学習者である生徒一人一人に、自己反省のきっかけや自己評価の素材と視点を与え、自己の改善・向上への取り組みを導き出し、方向づけるものでなくてはならない。また、自らの現状を吟味し問題点を発見し解決していくという自主的・自発的な態度も育成されなくてはならない。そういった意味からも自己評価を行う際に留意すべき点がある。梶田叡一氏は自己評価の3つの条件として以下のように提案している。

- ① 自分なりの目標や評価基準に照らしての自己評価であること
- ② 外的評価・客観的評価を踏まえた上での自己評価であること
- ③ 形成的な自己評価であること

とし、①では反省作文、自由記述型の自己評価を、②では教師からの客観的な情報のフィードバックやテスト等の自己採点と総合的な自己評価の組み合わせという方法を紹介している(梶田毅一「教育における評価の理論Ⅰ」金子書房 1994年6月)。

また、安彦忠彦氏は「自己評価は、単なる自分だけの評価から、『他者評価』を取り入れて一段高い質の『自己評価』に高まらなければならない」とし、自己評価と自己評価の間に生徒間の相互評価や教師を取り入れる必要性を説いている(安彦忠彦「自己評価」図書文化昭和62年10月)。なお今回は、事例1・2ともこの考えを取り入れ生徒の学習活動のねらいに留意して評価の形態を工夫した。

以上のことから、社会科の自己評価の方法は次のものが考えられる。

- ① 自己採点法
  - ア テスト結果の返却
  - イ テストの自己採点
  - ウ 練習問題の模範解答による自己点検
- ② 自己評価票(カード)
- ③ 相互採点法
- ④ 相互討議法

これに基づき、もう一度これまでの事例について触れてみよう。

事例1では、6時間の指導計画のうち2つの場面で生徒による自己評価あるいは相互評価が行われるよう評価計画上の配慮がされている。一つは第2時で、第1時で設定された生徒ごとの課題をKJ法で分類しその上で生徒のグループ分けを行う。そして、その課題を細分化し各自が分担して調べていく活動に入っていきのだが、このとき生徒は自分の長所を考えながら相互に自分の役割を決めていく。純然たる自己評価ではないが、自己を振り返る場面をつくったということで自己評価の要素を含んでいるものと考えられる。第二の場面は最後の発表のときで、自分のグループの発表についての自己評価と、他のグループの発表についての相互評価をカードに記入する場面である。評価内容は、おもに発表の方法に関することと発表の内容に関することである。この活動を行うことにより自己の学習活動を修正するなどの振り返りができ新たな学習意欲がはぐくまれることにつながる。

事例2では、15時間の指導計画中すべての時間において生徒の主体的な学習活動に対し自己評価あるいは相互評価を行った。たとえば、地域の人々へのインタビューなどの現地調査

について資料1のようなカードを活用し自己の振り返りをさせている。また、グループによる調査・発表活動について資料2のようなカードを活用して相互評価を行い自分たちの活動への評価だけでなく他のグループの活動に対しても評価を行い自分への振り返りとしている。この活動が次なる学習への意欲になりこの学習での自分の課題発見のきっかけとなることはいうまでもない。

これまでみてきたように、これからも歴史的分野における学習は、生涯学習の基礎を培う視点に立ち、自己教育力の高い生徒の育成という目標という目標をもって、生徒一人一人の「関心・意欲・態度」を高める学習活動と評価活動を展開することが必要である。そのために、身近な地域の素材を教材化した学習が有効であることが今回の研究で明らかになった。今後、多くの学校において教材開発がなされ、自己教育力の高い公民的資質をもった生徒が育成されることを期待している。

(倉橋保恵)

〈参考文献〉

- ・鈴木秀幸「指導と評価 1996年11月号」日本教育評価研究会
- ・「作業的、体験的な学習の充実」文部省 平成5年6月
- ・梶田叔一「教育における評価の理論」金子書房 1994年6月
- ・安彦忠彦「自己評価」図書文化 昭和62年10月





## IV. 公民的分野

## 1 公民的分野ではぐくむ学力

### (1) 意欲をはぐくむ学力について

#### ① 公民的分野で育成する学力

公民的分野で育成する学力を考えるために、学習指導要領の目標を分析してみる。

- ①国民主権を担う公民的分野として必要な基礎的教養を培う。
- ②自ら考えようとする態度を育てる。
- ③自国を愛し、その平和と繁栄を図り文化を高めることが大切であることを自覚させる。
- ④事実を正確にとらえ、公正に判断する能力と態度を育てる。

このことから、公民的分野で育成する学力を、

- ①「知識」としての基礎的教養
- ②「資料活用能力」と「思考・判断」としての事実の認識と公正な判断力
- ③「関心・意欲」として自ら考えようとする態度
- ④「態度」として自国を愛し、平和と繁栄を図り、文化を高める自覚

と分類した。

#### ② 公民的分野の現状

私たちの調査では、公民的分野が「嫌い・苦手」という生徒は、全体の2/3近くを占めている。理由は、「暗記が多い」「覚えられない」「言葉が難しい」「授業がつまらない」「先生が何を言っているのかわからない」などである。

このことは、私たちの授業に対する厳しい批判でもある。それは、「教科書を教える」「入試を意識した授業」など以前から問題になっていたことがいまだに改善されていないことを示している。

そこで、こうした状況を打ち破り、生徒が自分から社会科の学習に取り組むきっかけを作るためには、授業の改善を考えなければならない。自分から学習に取り組むためには、授業に興味・関心を持たせることが必要である。

授業の改善は、まず興味・関心をもつことができるような授業を組み立てることであ

る。しかし、ただ興味・関心だけでは、単におもしろおかしい授業で終わってしまう可能性もある。興味・関心が、意欲につながるような授業の組み立てが大事である。

このことが本研究のテーマである。

(木村雅英)

### ③ 研究課題の設定

②で述べた社会科学習の現状を踏まえ、さらに上に分類したすべての学力を育成するために授業を組み立てていく。しかし、1時間1時間のすべてに全部の項目を取り入れた授業を組み立てることは難しい。私たちは、以前からチーム・ティーチングの研究に取り組んでいる。T.T.の研究は、授業を面白くすることから始まった。

生徒たちは、T.T.の授業は面白いと言う。卒業していく時に、印象に残った授業としてT.T.で行った授業を挙げる生徒が多かった。しかも、1、2年生の時に実施した授業内容をよく覚えていた。

T.T.の授業では、その単元全体の導入、公民的分野全体の導入、など興味を持たせる授業の組み立てをねらいとしてきた。生徒の感想からそのねらいは達成できたと評価している。

また、T.T.では教師の個性や専門性を生かすことも、当然その授業形態（2人ないし3人で授業を行う）から可能である。

今回の研究は、このT.T.の研究成果も踏まえて行う。(T.T.の研究については、大田区立東調布中学校の研究紀要に発表されているものを参照されたい。)

T.T.の研究から、生徒の興味・関心をひきつけるような授業が、公民的分野の学習意欲を喚起する重要な要素であることが分かった。したがって、公民的分野の単元または教材に興味・関心を持つことが、学習意欲をはぐくむことにつながり、そのような授業を実施すれば公民的分野が求める学力が育成されると考えた。

また、「意欲」があれば、現在クローズアップされている「生涯学習」や「生きる力」の学習にもつながっていくと考えた。「生涯学習」や「生きる力」の学習には、「豊かな学習環境」が望まれる。公民的分野の学習には、インターネットの利用や学校外の人材の活用が考えられる。これらのメディアや学校外の人材を活用することは、「豊かな学習環境」を整えることの一つである。

公民的分野の学習で「意欲」をはぐくむためには、教室内で教師による授業を実施するだけでなく、教室から飛び出し外部の世界とつながった授業をすることが「豊かな学習環境」を整えることであり、そのことにより「生涯学習」や「生きる力」の学習が図

られると考えた。「生涯学習」や「生きる力」の学習が実現することは、とりもなおさず「意欲」が喚起されたことになる。

これらのことから、私たちの研究課題を次のように設定した。

馴染みのない教材（題材）を使って「意欲をはぐくむ」授業を組み立てるためには、どのような工夫が必要か？

## (2) 意欲をはぐくむ教材の工夫

### ① 教材について

公民的分野の学習で、身近な教材の開発という研究がよく見られる。身近な教材の開発はとても良いことであるが、単元によってはどうしても難しい教材やなじみのない教材を扱わなければならない。それは、公民的分野の特色でもあるが、景気対策、為替相場など生徒の生活とはかけ離れた教材であり、また裁判や法律についてなど生徒の理解にとって難しい単元がある。むしろ、このケースの方が多いかもしい。

例えば、国際連合や国際関係を扱う場合を想定してみよう。教科書には、国連の組織図やそれぞれの組織の説明をした表などがある。また、国際関係では、日本で初めて派遣された自衛隊のPKO活動の写真などである。このPKO活動の写真などは、新聞やTVのニュースに頻繁に登場し馴染みのある身近な教材（題材）のように思える。しかし、多くの生徒の生活レベルでは、私たちが考えるほど身近なものとはいえない。

また、最近では海外旅行を経験した生徒も多くなっているが、それでも為替相場の円高、円安の問題などを理解することは難しい。海外旅行の経験のある生徒にとっては身近であっても、理解の難しい教材であり、まして海外旅行の経験のない生徒にとっては身近な教材でもなく理解も難しい教材である。

このように考えると、これらの単元で身近な資料を探すことには限界がある。そこで今回の研究では、あえて普段生徒に馴染みのない教材を使って、その教材に興味・関心を持たせることを研究した。

また、本時の研究には、T.T.の導入を考えているが、T.T.に適した教材もあわせて研究する必要があるだろう。

それは、T.T.が複数の教師で実施されるのであるから、教材がさまざまな解釈をすることが可能であること（いくつかの価値観を含んでいるということ）、そして、生徒の理解度に合わせた解釈ができること（基本的なことから発展的な内容へと考えることができ

るということ) という条件を満たす教材である。

具体的にどのようなものがあてはまるか研究する必要がある。

## ② 意欲をはぐくむ授業について

馴染みのない教材(題材)を使って、どうしたら「意欲をはぐくむ授業」を組み立てることができるのだろうか。いくつかの工夫を考えてみた。(研究課題)

- ア. T.T.の導入
- イ. 教材の質
- ウ. 教材の視聴覚化
- エ. 外部の人材の活用
- オ. 授業の形態

### (ア) T.T.の導入

私たちの研究では、「討論」を行わせる時に教師のT.T.が必要であり、このことにより生徒の興味・関心が高まることが分かっている。そこで今回の研究でも「意見発表会」を取り入れるためにT.T.による授業を導入する。

「意見発表会」をT.T.で行うためには、何を題材にするかが重要な問題である。この題材が身近なものであれば、授業の工夫はT.T.の導入だけで十分である。生徒の生活レベルや感情的なレベルで考えることができれば、それで「意見発表会」は成立する。

しかし、今回の研究はあえて身近ではない、馴染みのない教材(題材)を使って「意欲をはぐくむ」ことを目的としている。「意見発表会」を成立させるためには、教材を分かりやすく解説しておかなければ自分の意見を持つことができない。

さらに、その教材が自分の「生きかた」にも関係していることを理解させることができれば、その教材を通して生徒自身の「意欲」が喚起されると考えた。

そこで、この教材を個々の生徒に理解させるためには、複数の教員による指導と評価が必要であり、また、「生きかた」を考えさせるための手段として「討論」が有効であると考えた。「討論」を成立させるためには、生徒に予備知識やその教材(題材)に対する興味・関心を引き起こすための工夫が必要である。その工夫が②～④のことにつながる。

また、最近では授業中に評価をすることが重視されている。ところが、その評価が指導過程の変更に結びつくような授業は行われていない。指導内容を詳しく説明しな

か、理解不足の生徒に個別に指導を加えるなどの対処療法的な指導が行われているのが現状である。

しかし、本当に授業中の評価を生かすのであれば、評価したことを指導過程の変更も含めて対応できなければならない。T.T.による指導は、指導過程のフレキシビリティという点でこの課題に応えることができる。

2人の教員が1つの評価に対して3通りの指導過程を考えていれば、2人の教員で6通りの指導が行える計算になる。これが3人のT.T.であれば9通りの指導過程となる。

実際には、ここまで指導過程を変更することが必要かどうか不明であるが、T.T.の導入によりフレキシビリティを持たせることは十分であろう。

このように考えてくると、本研究には、T.T.の導入が不可欠である。

#### (イ) 教材の質

従来の公民的分野の学習に使われている教材（題材）は、生徒の生活レベルで考えればほとんど馴染みのないものばかりである。ただ、教師は、日常的に新聞やTVなどのニュースでよく知っているので、身近な（馴染みのある）教材（題材）と思っているだけである。

本研究では、国際社会の単元を扱う。教材（題材）として「難民」を取り上げる。この教材は生徒の生活レベルでは、特に馴染みの薄いものであろう。そこで、難民という教材（題材）に興味・関心をもたせるために、この教材（題材）を生徒の「生きかた」につながるような教材化を試みる。具体的には、難民そのものの知識を与え、難民についての理解を図ることよりも、難民を救出するUNHCR（国連高等難民弁務官事務所）の活動やその活動と表裏一体をなすPKO活動を取り上げることにより難民の問題だけでなく、それに関わる人間の生きかたまでを生徒に考えさせることができると考えた。

そして、この教材が生徒の生きかたを問うことにつながれば、それは生徒の興味・関心を喚起し、学習する意欲へ繋がると考えた。つまり、教材が生かたに繋がる「質」を有しているかどうか重要な問題となる。

#### [仮説1]

身近でない（馴染みのない）教材（題材）でも、その教材が生かたに繋がるような教材化を図れば「意欲をはぐくむ」授業につながる。→教材の質を高める。

#### (ウ) 教材（題材）の視聴覚化

緒方貞子という人の名前を何人の人が知っているだろうか。まして、UNHCR（国連高等難民弁務官事務所）といわれても何のことかわからないだろう。

難民についても、時々TVのニュースや新聞で取り上げられ、その悲惨な状況が伝わってくる。また、女優の黒柳徹子さんのユニセフの活動が紹介されている。難民についての知識はその程度であろう。

大人でもこの状態であるので、生徒にはまったくといっていいほど予備知識はない。予備知識を与えるためには、「百聞は一見にしかず」である。見せること、聞かせることが第一条件である。幸い、UNHCRの日本事務所と連絡が取れ、「難民」についてのビデオやポスター、資料が多数あることが分かり、無料で提供してくれるとのことであった。

やはり、馴染みのない教材（題材）に予備知識なり興味を喚起するためには、見せることそれも実物またはそれに近いものを見せることが一番である。あとは、それをどのように料理するかが教師の腕であろう。本研究では、その料理の部分をT.T.で行う。

#### (エ) 外部の人材の活用

上記の①～③の工夫により、馴染みのない教材（題材）に興味・関心を持たせることはできるだろう。特に、T.T.による討論で、難民やUNHCRの活動を調べてみようという意欲を持つ生徒も出てくるだろう（いままでの研究では、ここまでの指導で「意欲」をもつ生徒が多数でてきた。）

しかし、今回の教材（題材）は、生徒の生活レベルとはかけ離れているものであり内容的にも難しいものである。興味があり、知識を持っていても、それだけで終わる可能性も大きいと考えられる。

そこで、実際にこのことに携わっている人、経験した人、じかに見聞した人などの話を直接生徒に聞かせることで、生徒の興味・関心を一層高め、さらにその人たちの活動を通して自分たちの生きかたを考えさせることまでできるのではないかと考えた。

つまり、外部の人材を活用することは、生徒の教材に対する理解を深めるだけでなく、その人たちの生きかたを直接見せることにつながると考えた。このことが、本研究の前記（イ）で述べた〔仮説1〕を具体化する方法である。

また、外部の人材の活用だけでなく、今後はインターネットを通じた教材の利用も選択肢の一つとして考えておくべきであろう。



〔仮説2〕

馴染みのない教材（題材）を「生かた」に繋げるためには、外部の人材の活用が必要である。→外部の人材を活用する効果

（オ）授業の形態

前記①～④のことを授業として組み立てようとした時、50分の授業では難しい。私たちは、2時間続きの授業を考えた。

2時間続きというのは、現実には難しい。特に今回は外部の人材を活用するために連続した2時間が必要なので、固定された時間割の枠内での実現は困難であった。

実際には、3年生の選択の授業として計画した。今、授業時間の弾力的な運用が認められているが、このことは、学校全体で考えなければならないことなので、社会科単独で弾力的な運用を考えるとすれば、選択授業しかない。そのために選択授業の履修は、2単位時間を連続して設定することも考えておかなければならない。（大田区立東調布中学校では、実際に2時間続きの選択社会の授業を実施している。）

## 2. 関心・意欲をはぐくむ授業と評価

(1) 「意欲をはぐくむ授業」の評価

上で述べた研究課題を検証するために「評価」が必要である。今回の研究では、「意欲」という情意面の評価をしなければならない。また、この「評価」により、授業が変わらなければならない。

私たちは、「評価」を従来より積極的に授業に取り入れようと考えた。その意味は、授業内での評価が、その授業の指導過程の変更につながるということである。そのためには、T.T.による授業で、それぞれ教師がその時の「評価」に対応した複数の指導過程を考えておき、実際の授業の流れを変えることができるようにする。

このように授業内の「評価」をすぐに授業に生かすことが、「意欲」をはぐくむ授業につながると考えた。

そこで、私たちは次の①～⑤を評価の観点とした。

① 生徒自身が行う自己評価

- ② 生徒を観察することによる評価
- ③ 討論の際など授業中に見られる生徒の発言による評価
- ④ 生徒のノートやワークシートなどに見られる生徒の表現による評価
- ⑤ 授業外での生徒の活動に対する評価

### ① 生徒自身が行う自己評価

これは、授業終了後に観点別学習状況の評価の観点にそって生徒自身に3段階程度の評価をさせる。その際、評価が厳しい生徒と甘い生徒がいることを事前に教師は把握しておく必要がある。

また、3段階程度のある意味で数値化された評価の他に、自由記述による評価も必要である。これは、授業に対する感想を聞くことで十分である。(感想の中から意欲に関係した箇所を評価すれば良い。)

ただ、これだけでは従来の評価と変わらない。授業の途中で生徒に評価させることが、授業を変えるためには必要である。学習課程で行う評価は、当然、上記のような評価の形とは異なる内容・方法となる。(生徒が評価するための時間とさらにそれを教師が判断する時間を考えればできるだけ単純な内容で手間のかからない方法での実施を考えることになる。)

### ② 生徒を観察することによる評価

これは、T.T.により可能となる評価である。複数の教師の目で授業中の生徒の様子を「意欲」という点に絞って観察することで評価することができる。観察のポイントは、生徒の態度である(よく目の輝きなどというが、実際には表情、話を聞くようす、ノートを取るようす、課題をしらべるようす、授業中のつぶやきなどが観察ポイントとなる)。

特に、今回の授業で、外部の人材を活用した場合は、その時の生徒の様子を複数の教師が評価することで「意欲」を持つことができたかどうかを判断することは可能であろう。

ただ、その評価を記録する方法が問題点として残る。(現状では、教師の記憶にたよるしかない。)

### ③ 討論の際など授業中に見られる生徒の発言による評価

これも、T.T.で研究してきた評価である。また、一般的にもよく行われている評価であ

る。発言の内容を分析することで評価できる。本研究では、「意欲」につながる発言を重点的に取り上げることになる。

この評価をT.T.で実施した場合は、他の生徒が発表した内容に対する個々の生徒のつぶやきを（すべてではないが）拾い上げることが可能となる。（研究の成果として確認されている。）

#### ④ 生徒のノートやワークシートなどに見られる生徒の表現による評価

これも、一般的な評価である。授業が終わった後、生徒たちの考えを知ることができ。「意欲」にしばった内容を書かせるために、発問を考える必要がある。

また、私たちのT.T.の研究では、授業中に与えた課題をノートに書かせ、その場で評価して返すという授業を実施し、成果をあげた。授業が終わった段階では、生徒がその授業を総合的に評価することになる。①で述べた評価につながるものである。

総合的に評価するだけでなく、授業の途中で生徒に書かせたものを評価することは、「意欲」につながる場面を考える上では重要である。そのためにもT.T.の授業の導入が必要となる。

#### ⑤ 授業外での生徒の活動に対する評価

これは、授業終了後に生徒がどのような行動をしたかを追跡調査して、「意欲」に結びつく事実を評価する。

例えば、この授業の内容を家族で話し合う、授業で扱った内容を自分で調べた、授業で扱った題材をTVのニュースで興味を持って見た、進路を考える時に選択肢の一つとして考えてみた、などさまざまなケースが考えられる。しかも、これらのケースは授業実施直後だけとは限らない。ある日ある時、自分がその場面に直面した時に「意欲」が喚起されてくる場合も考えられる。

このように考えると「生きかた」に繋がるという意味で重要な評価である。ただ、どのような場面でどのように評価するか、その方法をこれから開発しなければならない。（現状では、生徒と雑談の中で、あるいはその後の授業の中で生徒に尋ねるなどの方法しか思いつかない。）

①～⑤の評価は、授業の指導過程のフレキシビリティにつながるものであり、同時に「意欲」をはぐくむ授業を実現するために必要なものと考えた。

以上のことを踏まえて以下にその指導案を示す。

（石川達）

### 3. 関心・意欲をはぐくむ授業例

#### (1) 単元

国際社会における日本の役割（特設・2時間扱い）

#### (2) 単元の目標・本単元は3年生の公民的分野または選択社会科で設定する。

- ① 世界の様々な紛争などに対してどのような援助活動がなされているかをUNHCR（国連高等難民弁務官事務所）の活動を中心にして理解させる。
- ② 国際協力への関心と協力への意欲をもたせ、国際社会における日本の立場と役割について考えさせ、世界のためにどのような協力ができるかについて考えさせることで国際協力への興味・関心を高めさせる。

#### (3) 単元の主な学習内容

- ① 世界の地域紛争と国際機関の援助活動
- ② UNHCR（国連高等難民弁務官事務所）の活動紹介と職員とのインタビュー
- ③ 日本の国際協力に関する意見発表会

#### (4) 本時の目標

- ① 世界の紛争やそれに対する国際機関の動きについて知る。
- ② 世界の紛争や国際機関の動き、日本の国際協力について興味・関心を高める。

#### (5) 単元の評価基準

##### ● 社会的事象への関心・意欲・態度

国際機関の活動に関心をもち、日本がどのような協力をすべきかについて意見発表会の活動を通じて意欲的に取り組み、日本の国際協力について関心を高める。

##### ● 社会的な思考・判断

世界の紛争の背景を多面的に考察する。

##### ● 資料活用の技能・表現

資料集、新聞記事、VTR資料などから世界の地域紛争の様子や国際機関の活動を読み取り、これらを活用して意見シートに自分の意見を示す。

##### ● 社会的事象についての知識・理解

世界の紛争の背景や国際機関の活動についてその内容を知り目的を理解する。

(6)展開例（2時間扱い）

学習の流れ	教師の動き
<ul style="list-style-type: none"><li>● 最近の世界における紛争などを調べる。</li> <li>● 国際機関の動き UNHCRの例</li> <li>● UNHCRの活動</li> <li>● UNHCRの活動を紹介するVTRを見る。</li> <li>● UNHCR職員とのインタビュー</li>  <li>● 自己評価 UNHCRの活動について関心をもったこと</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>● 資料集や新聞の国際面から最近の事例について調べさせる。</li>  <li>● 生徒が調べた世界の紛争の中からUNHCRが関わっている事例を取り上げる。</li>  <li>● 難民や難民救済について補足する。</li>  <li>● 教師が取材した様子をVTRで見る。</li>   <li>● これまでの学習で関心をもったことを自由記述させる。書いたことを教師に提示させる。</li></ul>

指導・評価上の留意点	評価 [ ] =観点 ( ) =方法 *授業の記録
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 地理的分野や歴史的分野で学習したことを復習させる。</li>   <li>● VTRの内容で、難しい用語については、補説する。</li>   <li>● 難民が発生する背景については、軽くふれる。</li>   <li>● インタビュー以外の質問があれば受け付ける。</li> </ul> <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin-top: 20px; width: fit-content;"> <p>(資料写真1)</p> </div>	<p>[知識・理解]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● UNHCRの活動を知り、活動の内容と目的を理解したか。 (発言の分析、観察)</li>   <li>* VTRを視聴中の生徒の表情を観察して難民という語句の意味や難民が発生した国や地域について補説した。</li>   <p>[関心・意欲]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 国際機関の活動に興味・関心を高めることができたか。 (記述内容、発言の分析、観察)</li> <li>* UNHCRの活動内容について関心をもった生徒が多かったので指導を進行させた。記述がない生徒については、補充説明や口頭で発表させた。</li> </ul> </ul>

学習の流れ	教師の動き
<div data-bbox="226 396 526 525" style="border: 1px dashed black; padding: 10px; text-align: center;">意見発表会</div> <p data-bbox="192 540 271 567">テーマ</p> <ul data-bbox="192 586 615 1431" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="192 586 615 670">●日本はどのような国際協力ができるか。</li>   <li data-bbox="192 1066 418 1092">●意見を発表する。</li>   <li data-bbox="192 1165 615 1191">●自分の意見を意見シートに書く。</li>     <li data-bbox="192 1405 442 1431">●まとめ（自己評価）</li> </ul>	<ul data-bbox="681 396 1213 1431" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="681 396 884 422">●これよりT.T.</li>   <li data-bbox="681 586 1213 860">●意見をノートに書かせ、教師に提示させる。 意見を書いている生徒には、他の観点からも考えさせる。 意見を書いていない生徒には、いくつかの例を示して、例の中から考えさせる。</li>   <li data-bbox="681 929 1213 1005">●意見の内容によって同じような意見の生徒をグループにする。</li>   <li data-bbox="681 1073 1200 1100">●生徒の発言を代弁、補説などで援助する。</li>   <li data-bbox="681 1169 1213 1336">●意見発表会での他の生徒の意見を参考にして意見をまとめさせる。 ●具体的な行動内容がかかれるように援助する。</li>   <li data-bbox="681 1405 1173 1431">●ワークシートの自己評価欄に記入する。</li> </ul>

指導・評価上の留意点	評価 [ ] =観点 ( ) =方法 *授業の記録
<p>● T.T.におけるそれぞれの教師の援助 意見内容の把握 意見発表の援助・代弁</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px; text-align: center;">(写真資料2)</p> <p>● 様々な意見の交換が活発にできるように教師同士で意見発表を誘導する。</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px; text-align: center;">(写真資料3)</p> <p>● 生徒個人に応じて、漠然としたものから具体的な個人の行動計画があるものまで様々な意見が予想されるが、生徒個人の視点を生かし意見をまとめさせる。</p> <p>● 参考になった意見を発言した生徒の名を記録させる。</p>	<p>*教師が、それぞれ経済的な援助、平和維持活動への参加など生徒の参考になるような例を発言により示した。</p> <p>[関心・意欲] [技能・表現]</p> <p>● 意見をノートに書くことができたか。 (作品の分析、観察、発言の分析)</p> <p>*記述が進まない生徒には、口頭で質問することによって、考えをまとめさせ、記述するようにさせた。</p> <p>[関心・意欲]</p> <p>● 積極的に意見を発表できたか。 (観察、発言の分析)</p> <p>*生徒の表情の観察によって、発言をうながした。ほぼ全員の生徒に発言をうながした。</p> <p>[関心・意欲] [技能・表現]</p> <p>● 自分で定めた視点から意見をまとめ、日本の国際協力について関心を高めることができたか。 (作品の分析)</p>



## (7) 分析と考察

### ① 生徒の作品からの分析

#### ア A子の意見シート

平和というものは、日本国民のものであるとともに、世界の人々のためのものなのです。日本ができることとして、平和維持活動への参加など、いろいろと多くの問題があるけれども世界の人々と協力して共に汗を流すことは、人と人の触れ合いもあり、何より世界平和の近道になると思います。世界の平和に対して自分の意見を持ち、世界のことに少しでも関心をもてたことをうれしく思います。

#### イ A子の意見シートからの分析

A子は、平和が日本のために重要なだけでなく、広く世界のために必要なものであるところに着目し、日本が平和維持活動へ参加することは、世界の平和を保つために有効なことであると考えている。しかし、そこには多くの解決すべき問題点があることにも気づいている。

今回の学習を通して、具体的な行動目標は設定できないまでも、世界平和や国際協力に興味・関心を高めている。

#### ウ B子の意見シート

私は、UNHCRについては、よく知らなかったけれど、UNHCRの活動が世界の難民救助に大変役だっていることがよく分かりました。そして、このような活動をしていることを知り、私が以前から考えていた世界の国の中でボランティアをしていこうという気持ちが強くなりました。私も世界中の困っている人を救う仕事をしたいと思います。

#### エ B子の意見シートからの分析

B子は、UNHCRの活動が、世界の難民救助に役だっていることを知り、世界平和や難

民救済の活動に興味・関心を以前より高めている。UNHCRの活動について具体的に知り、活動している職員の姿を見たことが、興味・関心を以前より高めていると思われる。

さらに、UNHCRのような、世界の難民などを救う仕事をしたいという具体的な行動目標を設定している。UNHCRの活動に触れたことで、以前からの関心・意欲が、より高められ、行動目標の設定ができています。

#### オ C夫の意見シート

日本は世界の一員、国際連合加盟国の中の一カ国と考え、これからは他国と協力しながらODAやNGO、技術協力など積極的に進めていくべきだと思う。

世界平和のためになるならば、PKOなどにも積極的に参加していくべきだと思う。僕も世界平和に役立つUNHCRのような活動に参加していきたいと思う。

#### カ C夫の意見シートからの分析

C夫は、意見発表会で何回か発言することを通じて、日本の国際協力について、世界の中の日本、世界の一員としての日本という立場から考え、積極的に協力していくべきであるという意見をもつようになった。

そして、自分もUNHCRなどの活動に参加したいという活動への意欲も示している。積極的に発言することや他の意見を聞くことを通じて活動への関心・意欲が高まったものと分析できる。

#### ②T.T.の効果

ア T.T.を取り入れたことで指導と援助を増強することができた。このことが生徒にとっては、1人の教師の指導よりも質問しやすく、学習に取り組みやすいととらえている。このことが次の学習への興味・関心を高め、意欲的な取り組みをうながしている。

イ T.T.で多角的、変更可能の流動的に（フレキシビリティをもった）指導、援助し、複数の教師が評価することは、生徒個々の能力や活動に対応できた。このことは、生徒の自主的な活動をうながし、個々の生徒の興味・関心を高め、学習に意欲的に取り組ませることに有効である。

(佐藤洋)

〈資料〉

1 授業風景

資料写真1



資料写真2



資料写真3



## 2 授業に使用したUNHCRのビデオとポスター

UNHCR製作のビデオ

『難民もみんなも同じ地球人』

UNHCR製作のポスター



あなたの子はこんな絵を描きますか —— これは難民の子の絵です





あなたの子はこんな絵を描きますか —— これは難民の子の絵です



輸送

前後に深く積もった雪を国連保護軍が取り除いたあと、ボスニア中部のザニンツァに向けて、援助物資を運ぶトラック隊。ボスニア・ヘルツェゴビナ、1994年



## 難民とUNHCR

難民とは、生命や自由をおびやかされて、祖国を離れた人々です。

UNHCRは国連難民高等弁務官事務所は、

難民を保護し、人間としての基本的人権をまもり、

また、帰国すれば希望や帰国にまつべき命を失うような国へ、

難民が強制送還されないようにします。

UNHCRの本拠はジュネーブ(スイス)にあり、

約2600万人以上の難民と避難民のために世界123か国、255か所に

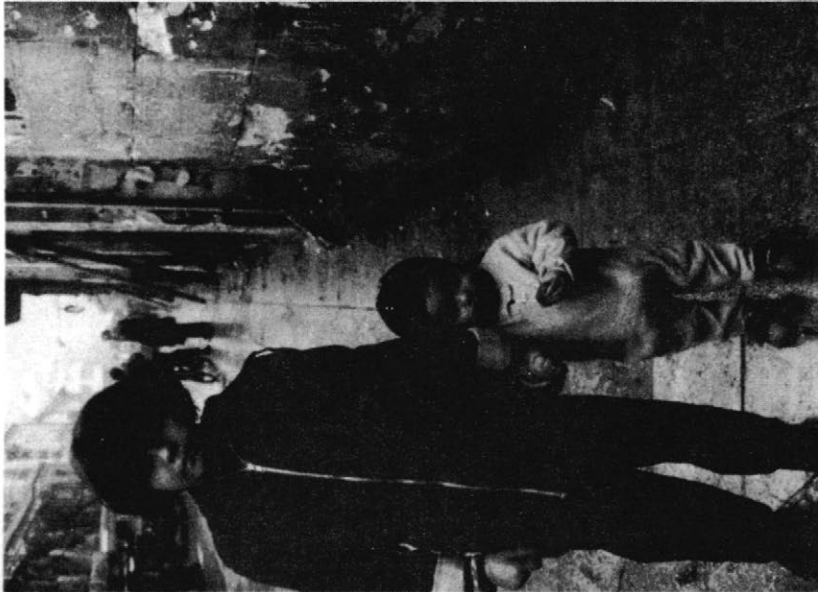
現地事務所をおいて活動しています。

現在、代表者は1991年1月に就任、94年1月に再選した難民高層評議員です。

UNHCRは1954年と1981年にノーベル平和賞を受賞しました。



1991年1月1日現在、国連難民高等弁務官事務所は、世界123か国、255か所に



2000年10月現在、国連難民高等弁務官事務所は、世界123か国、255か所に



子どもたち



世界衛生組織與國際移民組織合作，在泰國曼谷設立臨時收容所，為受緬甸軍事衝突影響的難民提供緊急援助。

環境



在泰國曼谷，國際移民組織與世界衛生組織合作，為受緬甸軍事衝突影響的難民提供緊急援助。

教育



### 3 UNHCRの職員の感想

「難民」について大田区立東調布中学校の社会科の授業で取り上げると聞き、参観させていただいた。ちょうどその頃、中学生向けの広報ビデオを制作中で、難民問題について中学生がどのように反応するのかをぜひ知りたいと考えていたからだ。

この日のテーマは、「国連PKOへ日本は参加すべきかどうか」で、生徒たちは、「賛成」や「反対」、「どちらともいえない」という三つの立場に分かれて議論した。

研究授業で特に印象に残った点を二つあげたい。一つは、約三十人の生徒に、三人の教師が指導にあたっていたことだ。それぞれの教師は、各グループにつき、生徒一人ひとりの意見が明確になるように質問したり、必要ならば補足する。そして、議論がかみ合うように調整役も果たしていた。こうした配慮が非常にきめ細かくなされていたように思う。

もう一つは、生徒たちが自分の意見をまとめて文章にしたり、話す能力の高さだった。選択科目のためもともと生徒たちのテーマに対する関心が高いのだろうが、恐らく、日常から良く指導されているに違いない。

意見発表会のよさは、自分の頭で考える力を養いながら同時に自分とは異なる意見を尊重する態度を身につけることにある。これらは、国際協力の分野などで仕事をする際に必要不可欠な能力だ。実際の難民援助の現場やPKO活動の現場は、より複雑で厳しい状況下でさまざまなレベルの決断をしなければならない。どの場合にも絶対正しいという選択をすることは非常に難しい。自分の責任において判断を下すという勇気と能力が要求される。

このような授業を通じて、将来、国際社会で活躍する人材が育まれていくことを望みたいと思う。

「中学校社会科における評価教材の開発」研究委員会

委員長 佐野 金吾（前新宿区立西戸山中学校長）

委員 石上 和宏（杉並区立泉南中学校）

石川 達（大田区立東調布中学校）

岩谷 俊行（杉並区立東田中学校長）

宇野 彰人（足立区立花畑北中学校）

木村 雅英（江東区立砂町中学校）

倉橋 保恵（文京区立本郷台中学校）

佐藤 洋（中野区立北中野中学校）

関 裕幸（北区立堀船中学校）

細谷 美明（板橋区教育委員会）

室木 忠雄（江東区立深川第二中学校）